小郡若山遺跡９

小郡市文化財調査報告書第 344 集

２０２２

小郡市教育委員会

＜序　文＞

本書は小郡若山遺跡９次調査の発掘調査報告書です。本遺跡ではこれまでに８次の調査が実施され、弥生時代から奈良時代にかけて集落が営まれていたことが分かっています。

国指定史跡小郡官衙遺跡とも近接しており、本調査でも奈良時代の建物跡を確認しました。主軸方向から小郡官衙遺跡第Ⅱ期と同時期の２×２間の総柱建物がみられます。弥生時代の集落では、中期集落だけでなく、後期の集落も確認でき、小郡・大板井遺跡群の後期環濠集落の南東方向への広がりを確認できました。

調査にあたりましては、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和４年３月 31 日

小郡市教育委員会 教育長　秋永　晃生

＜例　言＞

1．本書は、令和元年度に行った小郡市小郡に所在する「小郡若山遺跡９」の発掘調査記録である。

2．発掘調査は、国庫補助を受けて、小郡市教育委員会が実施した。

3．調査期間は、令和元年 12 月 24 日から令和２年２月 28 日まで実施した。調査面積は、152㎡である。

4．遺構の実測は担当者と一木賢人、川波亜衣（福岡大学生）が実施し、遺物の実測は久住愛子、担当者が行い、デジタルトレースは、宮崎美穂子が行った。遺物の洗浄・接合は佐々木智子・永富加奈子・山川清日・牛原真弓が行い、遺物の写真撮影は（有）システム・レコに委託した。

5．鉄製品のエックス線 CT 撮影は九州歴史資料館の協力を得た。

6．本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系 (世界測地系) に拠る。

7．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P.）を基準とした。

8．本書で用いた略号は、竪穴住居跡：SC　掘立柱建物跡：SB　土坑：ＳＫ　甕棺墓：ＳＴ　溝：ＳＤである。

9．遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。

10．本書の執筆と編集は山崎頼人が行った。

11．報告書の作成にあたっては、多くの方からご指導頂いた。感謝の意を表する。

久住猛雄（福岡市文化財活用部）、小林啓（九州歴史資料館）、武末純一（福岡大学）、

林大智（石川県埋蔵文化財センター）、真鍋成史（交野市教育委員会）、村上恭通（愛媛大学）

＜目　次＞

第１章　調査の経過と組織 …… 1

１. 調査に至る経緯 …… 1

２. 調査の経過 …… 1

３. 調査組織 …… 1

第２章　位置と環境 …… 2

第３章　調査の成果 …… 5

１. 調査の概要 …… 5

２. 弥生時代の遺構と遺物 …… 5

３. 奈良時代の遺構と遺物 …… 21

第４章　調査成果のまとめ …… 25

＜挿　図・表　目　次＞

第１図　小郡若山遺跡周辺の既往発掘調査区(s＝1/10,000) …… 3

第２図　小郡若山遺跡９全体図(s＝１/100) …… 6

第３図　１号住居跡　実測図(s＝１/50) …… 7

第４図　３・４号住居跡　実測図(s＝１/50) …… 8

第５図　１・３・４号住居跡出土土器実測図(s＝１/４) …… 9

第６図　２号土坑　実測図(s＝１/20) …… 11

第７図　２号土坑出土土器実測図①(s＝１/４) …… 12

第８図　２号土坑出土土器実測図②(s＝１/４) …… 13

第９図　３号土坑　実測図(s＝１/20) …… 14

第10図　３号土坑出土土器実測図①(s＝１/４) …… 15

第11図　３号土坑出土土器実測図②(s＝１/４) …… 16

第12図　１号甕棺墓　実測図(s＝１/20) …… 17

第13図　１号甕棺　実測図(s＝１/４) …… 19

第14図　小郡若山遺跡９出土石器･土製品･ガラス製品･鉄器実測図(s＝１/１,１/２) …… 20

第15図　１号掘立柱建物　実測図(s＝１/60) …… 22

第16図　１・２号柵列　３号掘立柱建物　実測図(s＝１/60) …… 23

第17図　１号土坑　実測図(s＝１/40) …… 24

第18図　小郡若山遺跡･小郡中尾遺跡･大板井遺跡出土初期鉄器(s＝１/２) …… 27

第１表　小郡遺跡･小郡官衙遺跡の既往調査の整理 …… 2

第２表　小郡若山遺跡9出土遺物観察表 …… 29

＜図　版　目　次＞

図版１　小郡若山遺跡９調査区全景（上空から）　小郡若山遺跡９調査区全景（北上空から）

図版２　小郡若山遺跡９調査区付近（上空から）　調査地から小郡官衙遺跡公園を望む（南東方向）

図版３　①１号住居跡土層断面（南西から）　②１号住居跡土層断面（南東から）
③１号住居跡中央土坑土層断面（南東から）　④１号住居跡焼土横土坑土層断面（西から）
⑤１号住居跡屋内土坑土層断面（北東から）　⑥１号住居跡屋内土坑土器出土状況（北から）
⑦１号住居跡ガラス小玉①出土状況（東から）　⑧１号住居跡ガラス小玉③④出土状況（東から）

図版４　①１号住居跡（北西から）　②１号住居跡西側ベッド状遺構（北西から）
③１号住居跡西側ベッド状遺構（南東から）　④西側ベッド状遺構土器出土状況（北から）
⑤１号住居跡東側ベッド状遺構（西から）　⑥１号住居跡床面検出状況（南東から）
⑦１号住居跡完掘状況（北西から）　⑧１・３・４号住居跡（北東から）

図版５　①３号住居跡土層断面（北西から）　②３号住居跡（西から）
③３・４号住居跡の先後関係（北東から）　④北西側遺物出土状況（南から）
⑤鉄ヤリガンナ出土状況（南から）　⑥４号住居跡土層断面（南西から）
⑦１・３号住居跡の先後関係（北東から）　⑧３・４号住居跡の先後関係（東から）

図版６　①１号土坑土層断面（東から）　②２号土坑土層断面（北西から）
③２号土坑遺物出土状況（東から）　④２号土坑遺物出土状況（南西から）
⑤３号土坑土層断面（南東から）　⑥３号土坑遺物出土状況１（南から）
⑦３号土坑遺物出土状況２（南西から）　⑧３号土坑遺物出土状況３（北西から）

図版７　①１号甕棺土層断面（南東から）　②目貼り粘土土層断面（南東から）
③１号甕棺検出状況（南東から）　④目貼り粘土詳細（南東から）
⑤１号甕棺検出状況（南から）　⑥１号甕棺下甕立割状況（南東から）
⑦１号甕棺上下棺検出状況（南から）　⑧１号甕棺内部状況（南東から）

図版８　①１号掘立柱建物（北西から）　②１号掘立柱建物（北東から）
③ＳＢ01ｐ１土層断面（西から）　④ＳＢ01ｐ２土層断面（南西から）
⑤ＳＢ01ｐ３土層断面（北東から）　⑥ＳＢ01ｐ４土層断面（北東から）
⑦ＳＢ01ｐ５土層断面（南東から）　⑧ＳＢ01ｐ６土層断面（北から）

図版９　①ＳＢ 01 ｐ７土層断面(東から)　②ＳＢ 01 ｐ８土層断面(南東から)
③ＳＢ 01 ｐ９土層断面(南東から)　④ＳＡ 01 ｐ１土層断面(南から)
⑤ＳＡ 01 ｐ２土層断面(北から)　⑥ＳＡ 02 ｐ１土層断面(西から)
⑦ＳＡ 02 ｐ２土層断面(西から)　⑧ＳＡ 02 ｐ３土層断面(西から)

図版10　１～３号住居出土土器　2号土坑出土土器

図版11　２・３号土坑出土土器

図版12　３号土坑出土土器　1号甕棺（上・下棺）
土製投弾（ＳＢ 01・ＳＣ 03・ＳＣ 04 出土）

図版13　泥窯片（ＳＣ 03 出土）　石庖丁（ＳＣ 01・ＳＫ 03 出土）
砥石（ＳＣ 01 出土）　黒曜石石核（ＳＴ 01 出土）

図版14　ガラス小玉（ＳＣ 01 出土）　粘土滓（ＳＣ 01 出土）
柄付き鉄製ヤリガンナ（ＳＣ 03 出土）

図版15　柄付き鉄製ヤリガンナＸ線ＣＴ画像（ＳＣ 03 出土）

第１章　調査の経過と組織

１．調査に至る経緯

本発掘調査は９次調査となる。平成30年１月24日付で照会文書（事前審査番号17145）が提出され、２月２日に申請地の試掘調査を実施した。その結果、開発予定地に弥生時代と奈良時代の遺構が存在することが明らかになった。これにより、建設前に発掘調査が必要な旨を伝え、その後協議を重ねた。協議の結果、住宅建設部分152㎡の調査を実施することになり、発掘調査は令和元年度国庫補助事業として行った。現地の発掘調査は令和元年12月24日に開始し、令和２年２月28日に終了した。

２．調査の経過

調査日誌より抜粋し、調査経過を記す。

2019年12月24日　表土剥ぎを行う。
12月25日　人力掘削開始。住居数軒、掘立柱建物数軒、土坑数基、周溝状遺構１を検出。
１月６日　竪穴住居とそれを切る掘立柱建物の切り合いを確認して掘立柱建物から掘削開始。大原小学生３名ほか見学。
１月17日　竪穴住居の掘削を開始。
１月24日　SC01よりガラス小玉の出土。
１月28日　SC01よりガラス小玉３点の出土。周辺の土壌をふるいにかけるようにする。
２月５日　小児棺の掘削を始める。
２月17日　初雪、寒波襲来。
２月18日　小郡官衙遺跡を守る会の方７名来跡、説明。
２月19日　空撮、ただし、霜柱がひどく、それを朝一番で取り除く作業を行った。
２月20日　住居の貼り床を掘削、切り合う住居も追調査。
２月21日　大原小学校３年生見学。
２月28日　埋め戻し、調査完了。

３．調査組織

［令和元年度調査　令和３年度整理作業］

小郡市教育委員会　教育長　清武　輝　（令和元年９月まで）
　　秋永　晃生（令和元年10月から）
　　教育部長　黒岩　重彦（令和２年３月まで）
　　山下　博文（令和２年４月から）
　　文化財課　課長　柏原　孝俊
　　係長　杉本　岳史
　　技師　山崎　頼人［調査・報告書作成担当］

第２章　位置と環境

本遺跡は筑後平野と福岡平野を繋ぐ二日市地狭帯の南側にあたり、九千部山に連なる基山の東側に広がる独立丘陵である三国丘陵から下った、小郡市中部に広がる段丘上に位置する。遺跡の南側を築地川が南東方向へ流れており、小郡市を南北に貫流する宝満川へと注ぐ。

小郡若山遺跡の東側には、小郡官衙遺跡（小郡遺跡）、大板井遺跡が展開している。また、小郡若山遺跡の南西にある若山堤の対岸には小郡中尾遺跡が広がっている。

小郡若山遺跡の調査はこれまで８次にわたって行われており（第１図）、既往の調査をまとめておく。

１次調査は、昭和 63 年２月８日に市道小郡東町 3251 号線の道路改良工事中に遺跡が発見され、それを受けて市都市建設部建設課と協議して計画地内の試掘を２月 17 日に行い、遺跡が存在する部分の調査を２月 22 日から行った。調査面積は市道幅４ｍ、600㎡程であったが、弥生時代中期中頃から後半の住居跡３軒、土坑 10 基、溝４条ほかを検出した。飛鳥から奈良時代の住居跡８軒、土坑１基を確認した。

２次調査は、平成２年度にアパート建設に伴って 474㎡の調査を実施し、弥生時代中期中頃の土坑１基、７世紀後半代の土壙墓２基が検出された。

３次調査は、平成４・５年度に小郡カトリック教会修道院建設に伴い調査が進められた。平成５年３月１日から調査を開始し、調査途中の４月１日に多鈕細文鏡が出土したため、小郡市埋蔵文化財調査指導委員会専門部会を招集し、４月６日に現地視察と審議が行われ、遺跡の性格を確実に把握するために発掘調査範囲の拡張を行うことになった。追加調査は４月 19 日から始め、５月 19 日に完了した。拡張区では多鈕細文鏡と同時期（須玖Ⅰ式）の竪穴住居跡３軒を検出し、当調査地が集落の一角であることが判明した。

４次調査は、平成６年度に小郡官衙遺跡北側の遺構分布状況の確認を目的として、市営若山住宅内の３か所の公園を調査対象として合計 90㎡の確認調査を行った。小郡官衙遺跡の北方区画溝（SD851）の延長を確認している。

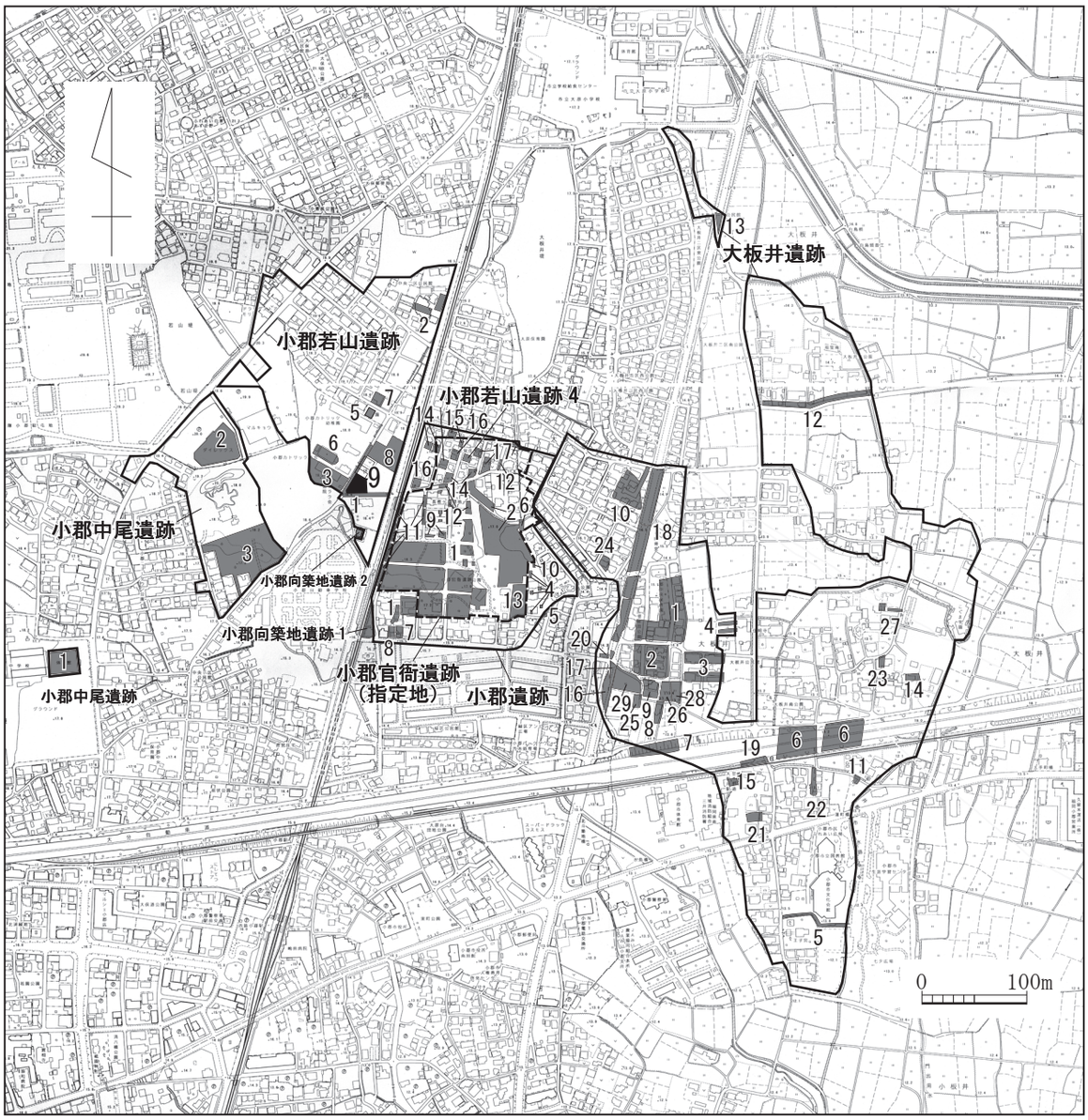
５次調査は、平成９年度に３次調査の弥生時代関連遺構の確認を目的に公園内の調査（120㎡）が行われた。弥生時代中期前葉の掘立柱建物２棟と中世ほかの土坑が検出された。

６次調査は、平成 12 年度に小郡カトリック教会建設に伴って 520㎡の調査を行った。弥生時代中期（須玖Ⅰ～Ⅱ式（古））の集落と７世紀中頃から後半にかけての集落が検出された。弥生時代の集落では住居跡２軒、祭祀土坑等の土坑５基、７世紀代の集落では、竪穴住居跡４軒、土坑２基、溝１条を検出した。弥生時代中期（須玖Ⅰ式～Ⅱ式（古））の３号住居跡中央土坑内からは鋳造鉄斧が出土している。

７次調査は、平成 12 年度の個人住宅建設に伴い国庫補助事業で 83㎡の調査を行った。時期不詳の

第1表　小郡遺跡・小郡官衙遺跡の既往調査の整理

調査次数	地点	期間	面積	調査原因	主な検出遺構	報告書
第1次	小郡遺跡1	1967・8・11～10・31	4700㎡	土地造成	Ⅰ期倉庫、Ⅱ期東方官衙群、Ⅲ期東方官衙群、Ⅲ期長方形区画	『小郡遺跡』
第2次	小郡遺跡1	1968・4・25～5・24	1500㎡	土地造成	Ⅱ期東方官衙群、Ⅲ期長方形区画	『小郡遺跡』
第3次	小郡遺跡1	1968・7・10～8・12	2800㎡	土地造成	Ⅰ期倉庫、Ⅱ期西方官衙群、Ⅱ期北方倉庫群	『小郡遺跡』
第4次	小郡遺跡1	1970・12・10～12・27	800㎡	土地造成	Ⅱ期西方官衙群	『小郡遺跡』
第5次	小郡遺跡2	1987・11・7～1988・1・16	5500㎡	宅地造成・範囲確認	Ⅱ期北方倉庫群	『小郡遺跡Ⅱ』
第6次	小郡遺跡3	1988・2～1989・2	（対象地）	内容確認	Ⅱ期の区画溝（方2町）、Ⅲ期長方形区画（築地）	『小郡遺跡Ⅲ』
第7次	小郡若山遺跡4	1995・1・10～1・27	90㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期SB850の一部	『小郡官衙周辺遺跡1』
第8次	小郡遺跡4	1996・2・2～1996・2・27	90㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期SB850東隅部分	『小郡官衙周辺遺跡1』
第9次	小郡遺跡5	1997・1・20～1997・2・27	25㎡	重要遺跡確認調査	Ⅱ期区画東辺	『小郡官衙周辺遺跡1』
第10次	小郡遺跡6	1998・1・19～1998・3・19	12㎡	重要遺跡確認調査	長者ヶ泉	『小郡官衙周辺遺跡1』
第11次	小郡遺跡7	1999・3・2～1999・3・12	180㎡	個人住宅	弥生時代遺構	『埋蔵文化財調査報告書4』
第12次	小郡遺跡8	2001・3・12～2001・3・27	128.8㎡	個人住宅	Ⅱ期南西の区画溝の一部か	『小郡官衙周辺遺跡2』
第13次	小郡遺跡9	1999・9・23～1999・9・28	206.1㎡	駐車場造成	Ⅲ期長方形区画	『小郡官衙周辺遺跡2』
第14次	小郡遺跡10	1999・9・29	3.3㎡	駐車場造成	遺跡東側、遺構削平	『小郡官衙周辺遺跡2』
第15次	小郡遺跡11	2000・2・22～2000・1・16	180㎡	下水道工事	Ⅰ期の溝、Ⅱ期西方官衙群周辺	『小郡遺跡11・12・13』
第16次	小郡遺跡12	2002・11・18～2003・2・11	100㎡	下水道工事	Ⅲ期長方形区画	『小郡遺跡11・12・13』
第17次	小郡遺跡13	2005・7・19～9・7	1104㎡	宅地造成	Ⅱ期区画内、北方倉庫群関連の空間か	『小郡遺跡11・12・13』
第18次	小郡遺跡14	2007・9・18～11・1	298㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内、Ⅱ期区画溝	『小郡遺跡14・15・16・17』
第19次	小郡遺跡15	2009・2・23～3・13	123㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内	『小郡遺跡14・15・16・17』
第20次	小郡遺跡16	2009・6・11～6・26	204㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内	『小郡遺跡14・15・16・17』
第21次	小郡遺跡17	2010・5・11～6・4	182㎡	重要遺跡確認調査	Ⅲ期長方形区画内	『小郡遺跡14・15・16・17』
第22次	小郡官衙遺跡1	2014・6・9～8・15	238㎡	重要遺跡確認調査	館エリアⅡ期建物2棟・Ⅲ期建物1棟	『小郡官衙遺跡』



第１図　小郡若山遺跡周辺の既往発掘調査区（s = 1/10,000）

溝４条が調査された。

８次調査は、平成 26・27 年度に個人住宅６軒分の調査（合計 510.39㎡）を国庫補助事業で行った。弥生時代中期の竪穴住居跡２軒、祭祀土坑を含む土坑 15 基、小児甕棺墓１基、周溝状遺構３基、溝状遺構５条ほかを検出した。

隣接する小郡官衙遺跡では、これまでに 22 次の調査が行われている。これまでの調査では遺跡名が錯綜しており、保存管理計画で国指定史跡小郡官衙遺跡の保護が必要な部分について検討し、「小郡官衙遺跡」の包蔵地を更新した。小郡若山遺跡４も「小郡官衙遺跡」に包括される。

弥生時代の小郡若山遺跡は周辺の小郡遺跡、小郡中尾遺跡、大板井遺跡を合わせての遺跡群として評価し、その変遷や構造を明らかにする必要があり、奈良時代では、推定御原郡衙である小郡官衙遺跡周辺の様相を明らかにできる遺跡である。

[参考文献]

小郡市教育委員会 1989『小郡若山遺跡・干潟遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第 57 集
小郡市教育委員会 1990『小郡若山遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第 69 集
小郡市教育委員会 1994『小郡若山遺跡３』小郡市文化財調査報告書第 93 集
小郡市教育委員会 1998『小郡官衙周辺遺跡１（小郡若山遺跡４・５）』小郡市文化財調査報告書第 128 集
小郡市教育委員会 2001『小郡若山遺跡６』小郡市文化財調査報告書第 159 集
小郡市教育委員会 2015『埋蔵文化財調査報告書７－平成 25 年度国庫補助事業 市内遺跡調査報告書－（小郡若山遺跡７）』小郡市文化財調査報告書第 228 集
小郡市教育委員会 2017『埋蔵文化財調査報告書９－平成 26・27 年度国庫補助事業 市内遺跡調査報告書－(小郡若山遺跡８)』小郡市文化財調査報告書第 310 集

第３章　調査の成果

１．調査の概要

本遺跡はこれまでに８次の調査を実施している。周辺でも確認されている弥生時代集落と奈良時代集落に伴う遺構が確認された。

奈良時代の総柱建物は、主軸方向から小郡官衙遺跡第Ⅱ期と同じ時期の可能性がある。その他、長方形状の掘り方を持つ柱穴が確認されたが、削平を受けており残存はわずかであり、調査区内では建物を復元するには至らなかった。そのため、柱列として報告している。

弥生時代の集落は、中期の住居跡だけではなく、後期の住居跡も確認でき、小郡・大板井遺跡群の後期環濠集落の北東方向への集落域の広がりを確認できた。

検出した遺構は、弥生時代中期の住居跡２軒、祭祀土坑２基、周溝状遺構１基、小児棺１基、後期の住居跡１軒、弥生時代の掘立柱建物１棟、奈良時代の掘立柱建物１棟、柱列２列、土坑１基等であった。大きく、弥生時代の遺構と奈良時代の遺構に分けて報告する。

なお、出土遺物の詳細については遺物観察表を参照して頂きたい。

２．弥生時代の遺構と遺物

（1）住居跡

１号住居跡（第２・３図、図版３）

調査区中央から東側、標高 18.2 ｍで検出した。１号掘立柱建物、２号柵列より先行し、３・４号住居、２号土坑に後出する。南隅部分は調査区外に及ぶ。長軸７ｍ×短軸 5.05 ｍの長方形状を呈し、検出面からの深さは 25㎝程度である。長軸方向は北東―南西である。埋土は下層に灰黄褐色粘質シルト～にぶい黄褐色シルトがみられ、焼土粒や黄褐色粘土ブロックを含んでいる。上層では暗褐色シルト～褐灰色粘質シルトが堆積している。

短辺にはベッド状遺構を持ち、東辺では中央部分をあけて二つに分かれている。西辺は地山削り出しのベッド状遺構である。東側は３・４号住居と重複しているため、地山削り出しが出来ず、盛土整形になったものと思われる。ベッド状遺構の床面からの高さは 10㎝程度である。４～ 8㎝程度の貼床が施されており、炉の周辺は固く締まっている。中央に直径 60㎝、深さ 12㎝程度の円形の炉を持っており、北西側は炉堤状の５㎝程度の高まりを残している。埋土は灰褐色土ににぶい褐色粘質土ブロック（２㎝大以下）、焼土粒や炭の小片が少量入っている。主柱はその炉跡を挟んで２本かと思われる。北西側は長軸 35㎝×短軸 25㎝、深さ 32㎝の柱穴（P1）が確認できる。南東側は１号掘立柱建物の柱穴２と重複する位置にあると考えられ、その下層でピット状に一段下がる部分がみられた（P2）。炉の南東側には１ｍ× 0.95 ｍ、深さ 20㎝の不整円形の屋内土坑（SK01）がみられ、弥生土器甕下半部（２）、壺底部（５）が出土した。埋土は黒褐色粘質土でにぶい褐色粘質土ブロック１㎝大が入る。壁際には焼土の塊が南西辺と北西辺に２か所みられた。北西辺の焼土横の小土坑（SK02）は 45㎝× 35㎝、深さ 16㎝程度で埋土は灰褐色粘質土ににぶい褐色粘質土ブロック２㎝以下、炭小片がわずかに入る。

炉の北東側の床面直上や床面付近の埋土中からガラス小玉５点の出土を確認した。ガラス小玉の出土を確認後、周辺の土をふるいにかけたが、新たには見つからなかった。また、南西のベッド状遺構の縁付近で床面に近い埋土中から土器が数点出土した。

出土遺物（第５・14 図、図版 10・13・14）

弥生土器甕口縁部（第５図１）、弥生土器甕口縁部～胴部、胴部～底部（２）、弥生土器台付鉢（３）、弥生土器壺頸部～体部（４）、弥生土器壺底部（５）、手づくね土器鉢（６）が出土した。甕口縁部（１）は、西南辺ベッド状遺構の土器③から出土した。弥生土器甕（２）は西南辺ベッド状遺構の土器①と SK01 土器①、および SC01 埋土下層が接合した。上半と下半は、直接は接合しないが同一個体と考えられる。底部はレンズ状となっている。台付鉢（３）は西南辺ベッド状遺構の土器④、壺底部（５）は SK01 の土器②の位置から出土した。屋内土坑 SK01 土器①（甕下半部）と 2.6 ｍ離れたベッド状遺構の土器③（甕上半部）が接合し、周辺の土器群とともに住居廃絶時の状況が看取できる。

第２図　小郡若山遺跡９全体図（s ＝ 1 /100）

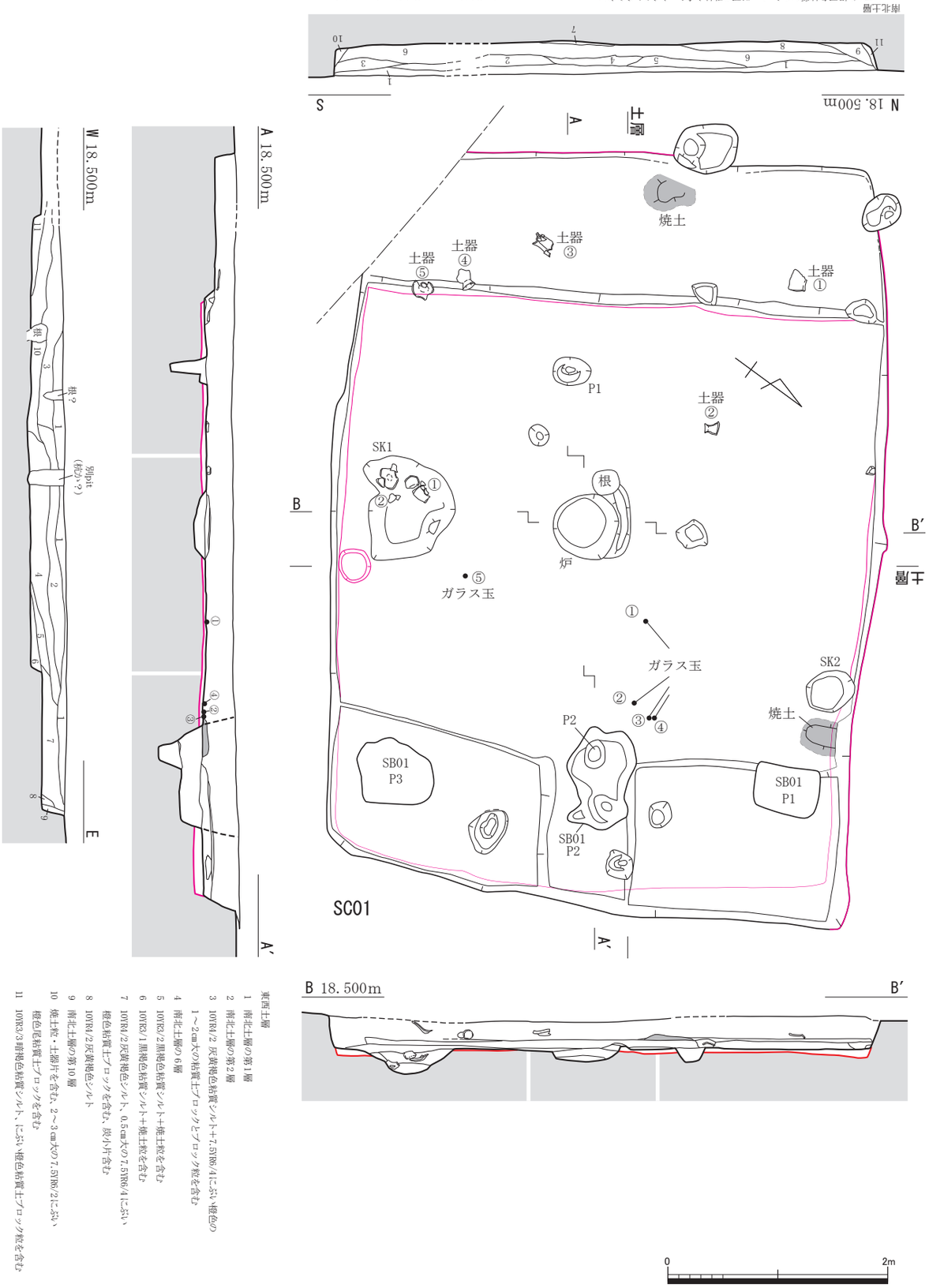
他に、菫青石ホルンフェルス製石庖丁（第 14 図２）、粘板岩製砥石（４）、ガラス小玉（８～ 12）が出土した。石庖丁は左の紐孔部で破損している。A・B 面共に中央部には粗研磨面を残している。刃こぼれが観察できる。砥石（４）は、上端部が緩やかにカーブして厚みを減じている。右側と下端を破損しているが、現状で表面と左側面が研磨されている。裏面は左側面端部では研磨面が確認できるが、うすく剥離している。左側面に摺り切り痕跡がまた。表面全体的に黒みがあり、側面には黒色物質が一部付着している。板石硯の可能性も考えたが、硯の使用痕はなく、平行する擦痕が数単位あり、砥石の可能性を考える。ガラス小玉（８～ 12）は色調淡青色（青銅着色）で、引き伸ばし技法によって成形されている。また、焼粘土塊片が埋土から 282 g 分出土した。

そのほか、粘土滓かと思われるもの（図版 14）、磨石片、黒曜石剥片、軽石片が出土した。粘土滓は長さ 2.78㎝、幅 2.21㎝、厚さ 1.82㎝である。

２号住居跡：欠番

３号住居跡（第２・４図、図版５）

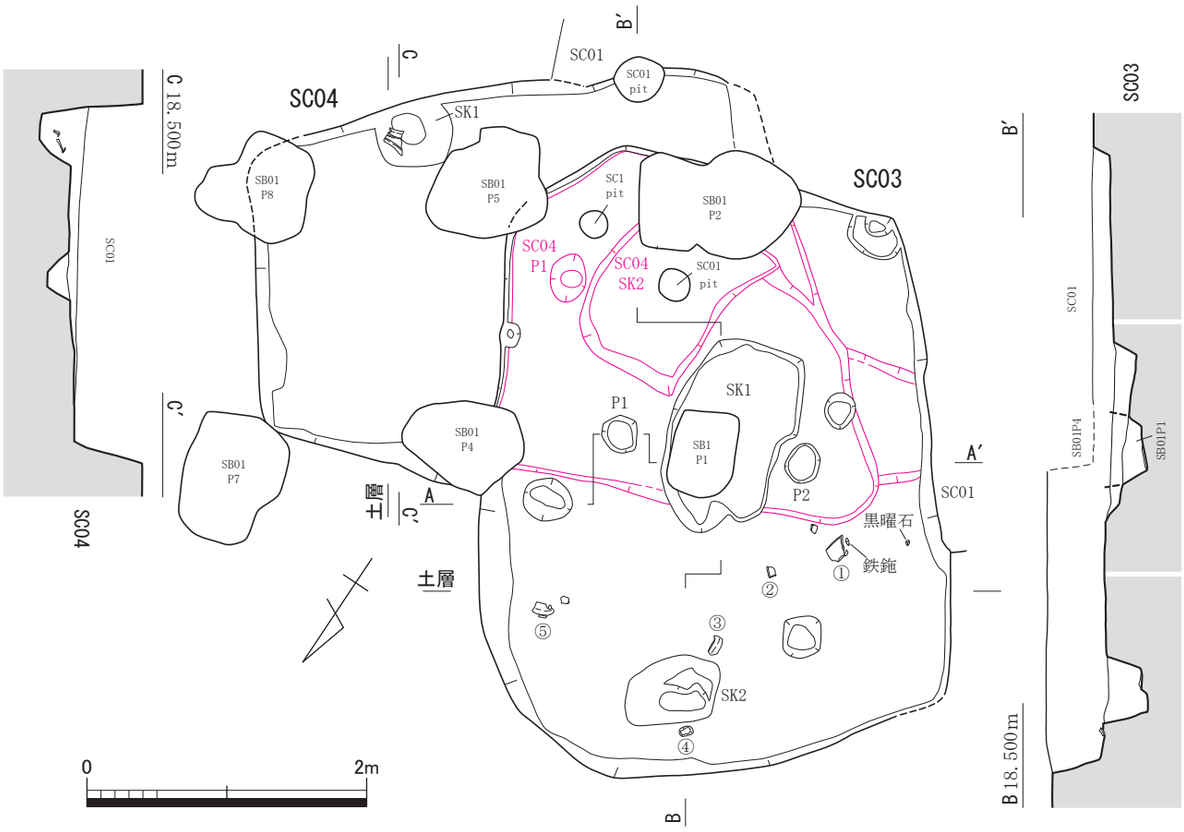
調査区東側、標高 18.2 m で検出した。１号掘立柱建物、２号柵列、１号住居より先行し、４号住居に後出する。長軸 4.53 m × 短軸 3.38 m の小判形を呈し、検出面からの深さは 42㎝程度である。長

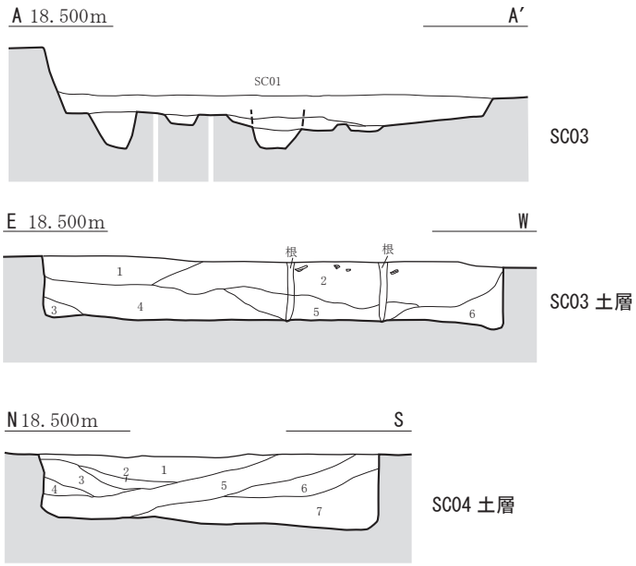


南北土層
1 10YR4/1褐灰色粘質シルト、1㎝以下の砂粒を含む、あまりしまらない
2 10YR3/2黒褐色シルト+2～3㎝大の 10YR6/6明黄褐色粘質土
ブロック・焼土粒・炭小片を含む
3 10YR4/2灰黄褐色シルト、焼土粒を含む
4 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト、焼土粒を含む
5 10YR3/3暗褐色シルト、焼土粒を含む
6 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、焼土・ブロックを含む
7 10YR3/2灰黄褐色粘質シルト、しまる、焼土粒を含む
8 10YR4/2灰黄褐色粘質シルト、しまる、焼土粒・炭を含む
9 10YR4/2灰黄褐色シルト+1～2㎝大の 10YR3/8黄褐色粘土ブロックを含む
10 10YR4/1褐灰色シルト、しまる
11 10YR4/3にぶい黄褐色シルト、しまる

東西土層
1 南北土層の第1層
2 南北土層の第2層
3 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト+7.5YR6/4にぶい橙色の
1～2㎝大の粘質土ブロックとブロック粒を含む
4 南北土層の6層
5 10YR3/2黒褐色粘質シルト+焼土粒を含む
6 10YR3/1黒褐色粘質シルト+焼土粒を含む
7 10YR4/2灰黄褐色シルト、0.5㎝大の7.5YR6/4にぶい
橙色粘質土ブロックを含む、炭小片含む
8 10YR4/2灰黄褐色シルト
9 南北土層の第10層
10 焼土粒・土器片を含む、2～3㎝大の7.5YR6/2にぶい
橙色粘質土ブロックを含む
11 10YR3/3暗褐色粘質シルト、にぶい橙色粘質土ブロック粒を含む

第３図　１号住居跡　実測図（ｓ＝１/50）





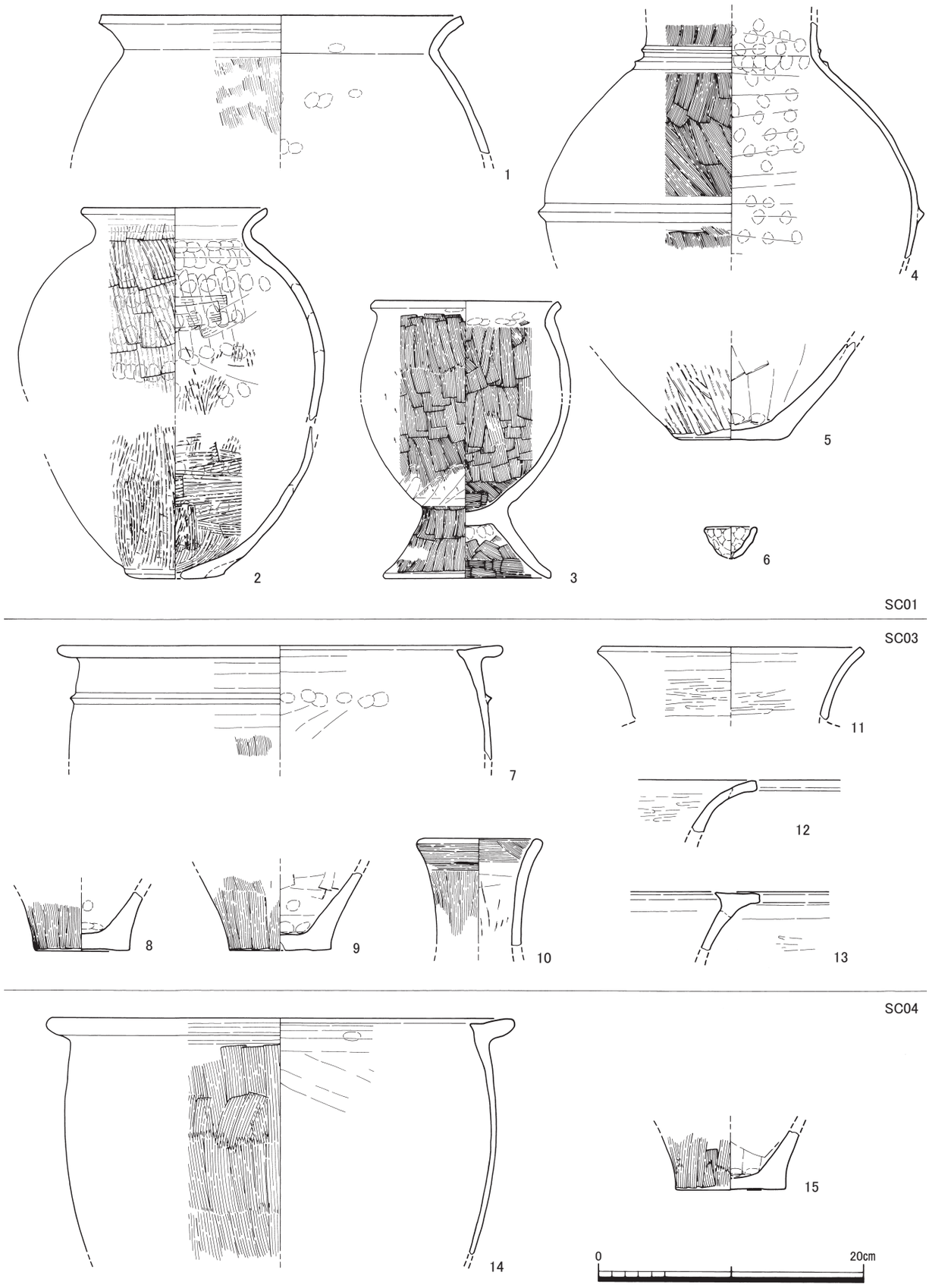
SC03 東西土層

1 10YR3/2 黒褐色シルト、にぶい黄褐色粘質ブロック＋0.5㎝大の炭小片を多く含む
2 7.5YR3/2 黒褐色シルト、0.5～1㎝大のにぶい黄褐色粘質ブロック・1～2㎜大の炭小片を多く含む
3 10YR2/2 黒褐色シルト、0.5㎝大のにぶい黄褐粘質ブロックを含む
4 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト、0.5㎝大のにぶい黄褐粘質ブロック・0.5㎝大の炭小片を多く含む
5 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルト
6 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、2～3㎝大のにぶい黄褐色粘質ブロック・0.5㎝以下の炭小片を含む

SC04 南北土層

1 10YR4/2 灰黄褐色シルト＋0.5㎝大の黄褐色ブロックがわずかに入る
2 10YR3/1 黒褐色シルト
3 10YR2/1 黒色粘質シルト＋2～3㎝大のにぶい黄褐色粘土ブロックが入る
4 10YR2/1 黒色粘質シルト
5 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト＋1㎝大のにぶい黄褐色粘土ブロック多く入る
6 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト＋1～2㎝大のにぶい黄褐色粘土ブロック・黄褐色ブロック多く入る
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト＋1～2㎝大の黄褐色ブロック・黒色ブロック多く入る

第４図　３・４号住居跡　実測図（ｓ＝１/50）



第５図　１・３・４号住居跡出土土器実測図（ｓ＝１／４）

軸方向は北北西―南南東である。埋土は黒褐色系シルトである。
中央に住居の長軸方向に長い 145cm× 90cm、深さ 10 ～ 15cm程度の長円形状の土坑を有する。埋土は灰褐色土で炭と粘土の小片とが混じっていた。炉と考えられ、その両側に直径 25cm程、深さ５cm程度の浅いピットがみられる。北側には長軸 70cm×短軸 45cm、深さ 28cm程度の屋内土坑がみられる。貼床はみられない。
床面付近からは土器や鉄製ヤリガンナ、黒曜石石核が出土した。特に鉄製ヤリガンナは床面直上からの出土である。

出土遺物（第５・14 図、図版 10・12 ～ 15）
弥生土器甕口縁部（第５図７）、弥生土器甕底部（８・９）、弥生土器器台（10）、弥生土器広口壺口縁部（11・12・13）が出土した。（11・12）は素口縁で、（13）は内側に突出する水平口縁である。
甕底部（８）は SK02 北側の床面直上土器④、壺口縁部（11）は北西側土器⑤、壺口縁部（12）が北西側土器③から出土している。甕底部（７）は埋土上層から出土し、SC01 の貼床層出土破片と接合している。
他に、土製投弾（第４図５）、泥窯窯壁片（７）、鉄製ヤリガンナ（13）が出土した。窯壁片（７）は片側の面から繊維圧痕が顕著に確認でき、縦に走っている。板状の平坦面もみられる。破片６個を接合したが、そのほか、焼粘土塊片が埋土から 330 ｇ分出土しており、それらを含めて、弥生土器焼成の泥窯の破片の可能性を考える。鉄製ヤリガンナについては、詳細は第５章で後述する。
そのほか、黒曜石剥片が出土した。

４号住居跡（第２・４図、図版５）
調査区北東、標高 18.3 ｍで検出した。１号掘立柱建物、１・３号住居、１号甕棺墓より先行する。長軸 4.4 ｍ、北東短辺 1.9 ｍ、南西短辺 3.0 ｍの梯形を呈し、検出面からの深さは 40cm程度である。長軸方向は北東―南西である。埋土は比較的黄褐色粘土ブロックが多く入る、黒褐色シルトで、南側からの堆積が先行する。床面中央に 36cm× 24cm、残存深さ 15cmの長円形柱穴がみられる。その西側には 126cm× 92cm、残存深さ 10cm程度の方形土坑があり、南東辺壁際に 54cm× 40cm、深さ 20cm程度の土坑がみられた。壁際 SK02 埋土上層で弥生土器甕が出土している。貼床はみられない。

出土遺物（第５・14 図、図版 12）
弥生土器甕口縁部（第５図 14）、弥生土器甕底部（15）が屋内土坑 SK01 から出土した。
他に土製投弾（第 14 図６）が出土した。また、焼粘土塊片が埋土から 20.6 ｇ分出土した。
そのほか、黒曜石剥片、軽石片が出土した。

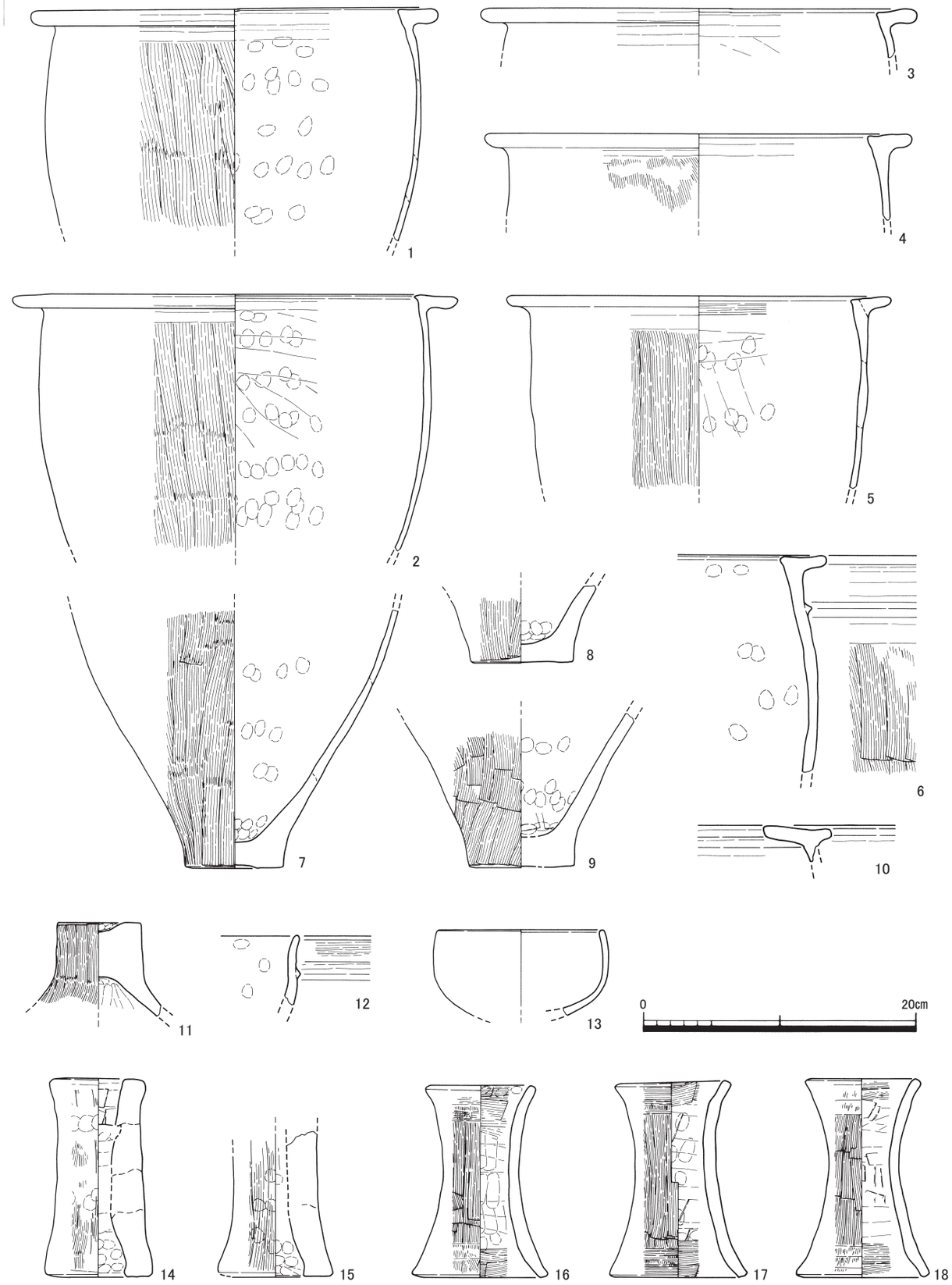
（２）土坑

２号土坑（第２・６図、図版６）
調査区の中央、標高 18.4m で検出された。１号住居に先行する。長軸 1.7 ｍ、短軸 1.06 ｍの隅丸長方形状を呈し、検出面からの深さは、90cm程度である。床面からはほぼ直に立ちあがる。下層は黒色粘質シルトで大型土器片を多く含み、中層では黒色粘質シルトで土器片や焼土粒を含んでいる。上層は黒褐色～灰褐色粘質土で焼土粒・炭小片、土器小片を含んでいる。中・下層で多くの土器が出土している。なお、広口壺（19：出土状況図⑪）が１号甕棺墓の墓壙南西側から出土した広口壺口縁部片と接合した。

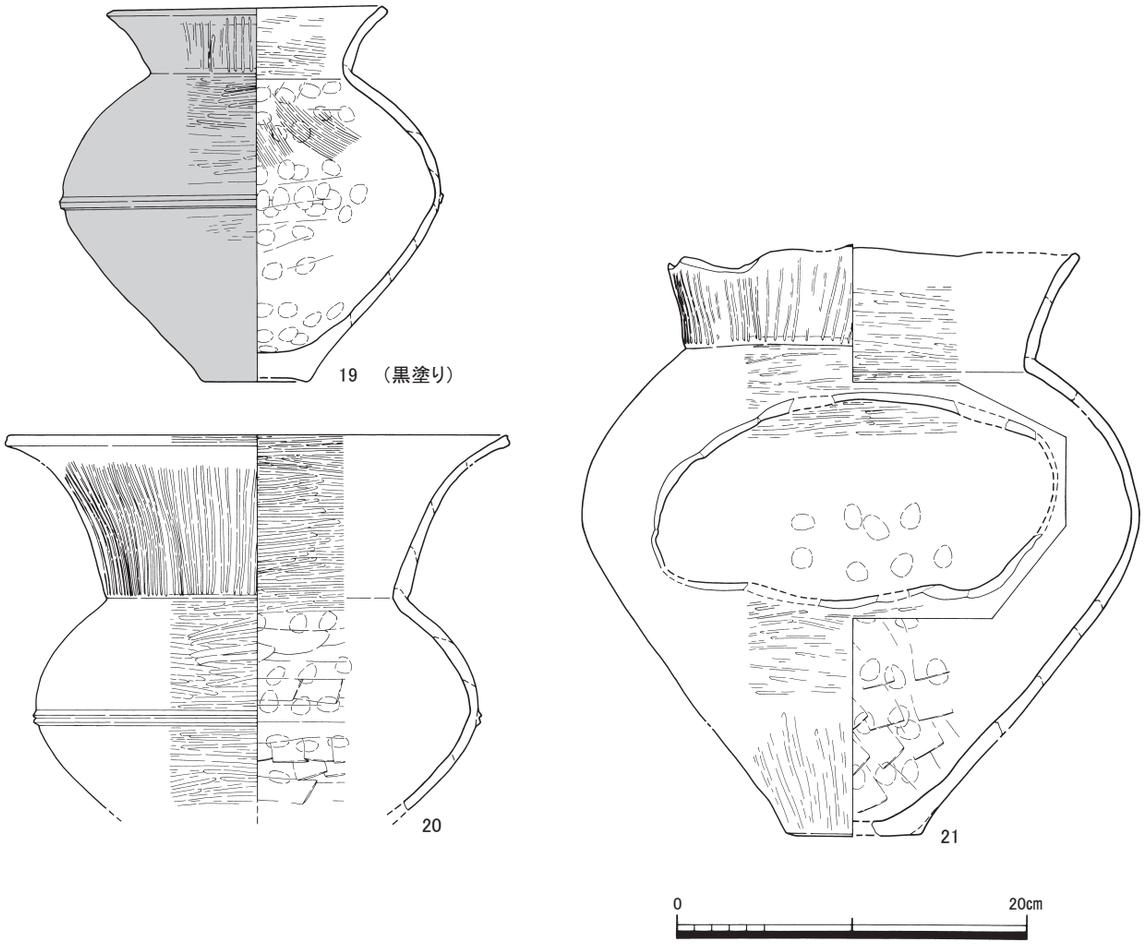
出土遺物（第７・８図　図版 10・11）
弥生土器甕口縁部（第７図１～６）、弥生土器甕底部（７～９）、汲田式甕棺口縁部（10）、弥生土器蓋天井部（11）、弥生土器鉢口縁部（12）、弥生土器高坏坏部（13）、弥生土器支脚（14・15）、弥生土器器台（16 ～ 18）、弥生土器広口壺（19 ～ 21）が出土した。甕口縁部（１）が出土状況図⑰と⑧⑨⑪、

1　灰褐色土粘質土（砂粒・土器小片を含む）
2　黒褐色粘質土（焼土粒・砂粒を含む）
3　黒褐色粘質土（焼土粒・炭小片を含む）
4　灰褐色粘質土（焼土粒・炭小片を含む）
5　黒褐色粘質土＋0.5㎝以下のにぶい褐色粘質土ブロックを含む
6　黒褐色粘質土（焼土粒・炭小片を含む）
7　黒色粘質シルト＋0.5㎝以下の黄褐色粘質土ブロックを含む
8　黒色粘質シルト（焼土粒・土器片を多く含む）
9　黒褐色粘質土＋黄褐色粘質土ブロック（流入土）
10　黒色粘質シルト（大形土器片を多く含む）

第６図　２号土坑　実測図（ｓ＝１/20）



第７図　２号土坑出土土器実測図①（ｓ＝１／４）



第８図　２号土坑出土土器実測図②（ｓ＝１／４）

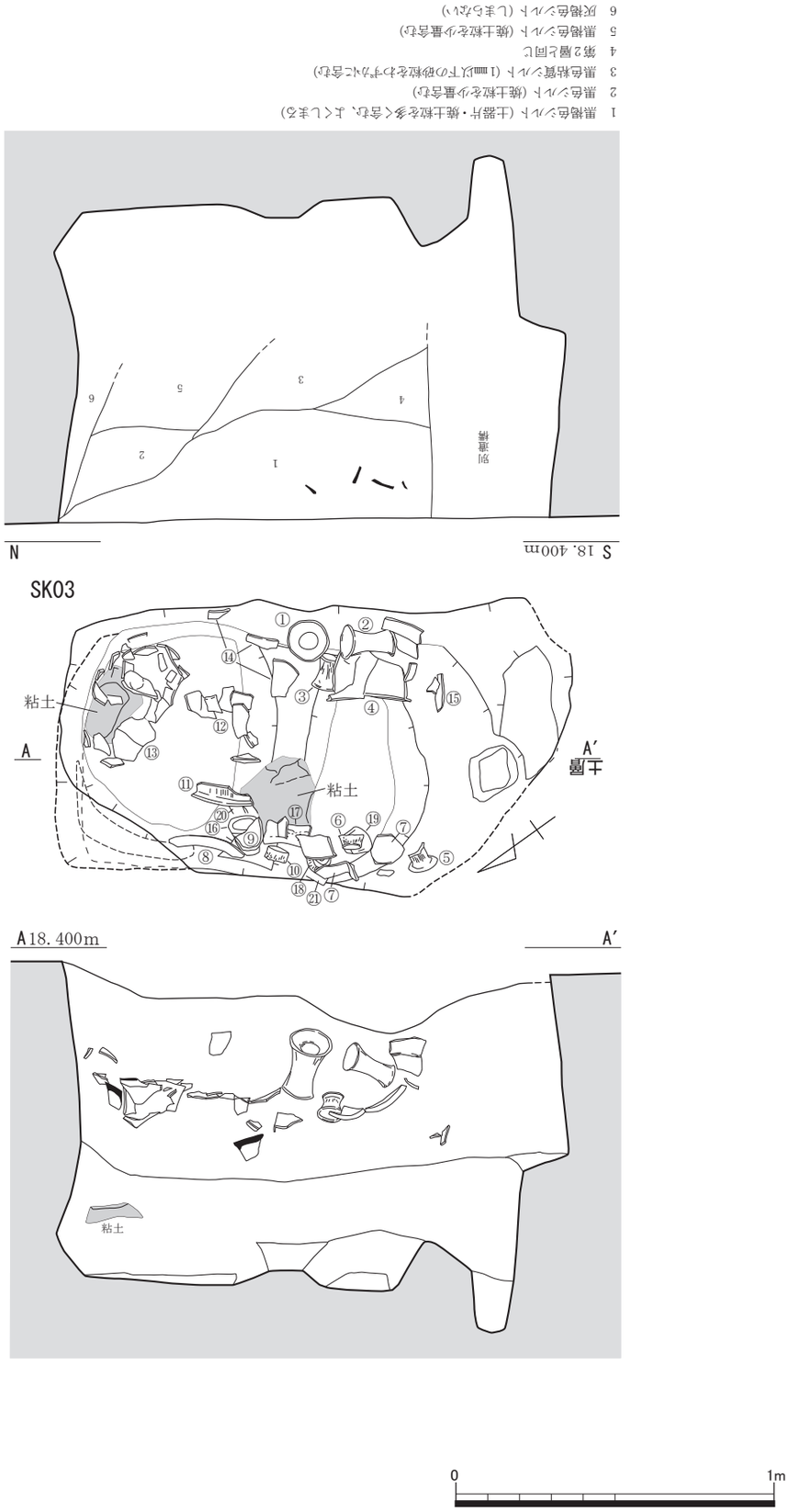
甕口縁部（２）が出土状況図③、甕口縁部（３）が出土状況図⑰下、甕口縁部（４）が出土状況図⑫、甕底部（７）が出土状況図⑥、甕底部（９）が出土状況図⑤、蓋天井部（11）が出土状況図⑦、支脚（14）が出土状況図①、支脚（15）が出土状況図④、器台（16）が出土状況図⑩、器台（17）が出土状況図⑭、器台（18）が出土状況図⑮、広口壺（19）が出土状況図⑪、広口壺（20）が出土状況図⑧、広口壺（21）が出土状況図②⑤に該当する。

広口壺（19）は黒塗りである。器表面が磨滅しておりはっきりわからないが、広口壺（20）は丹塗りの可能性、広口壺（21）は黒塗りの可能性が考えられる。いずれも頸部には細い縦ミガキが確認でき、広口壺（21）は口縁部を全周打ち欠いており、体部上半は楕円形状に窓状に打ち欠きを行っている。

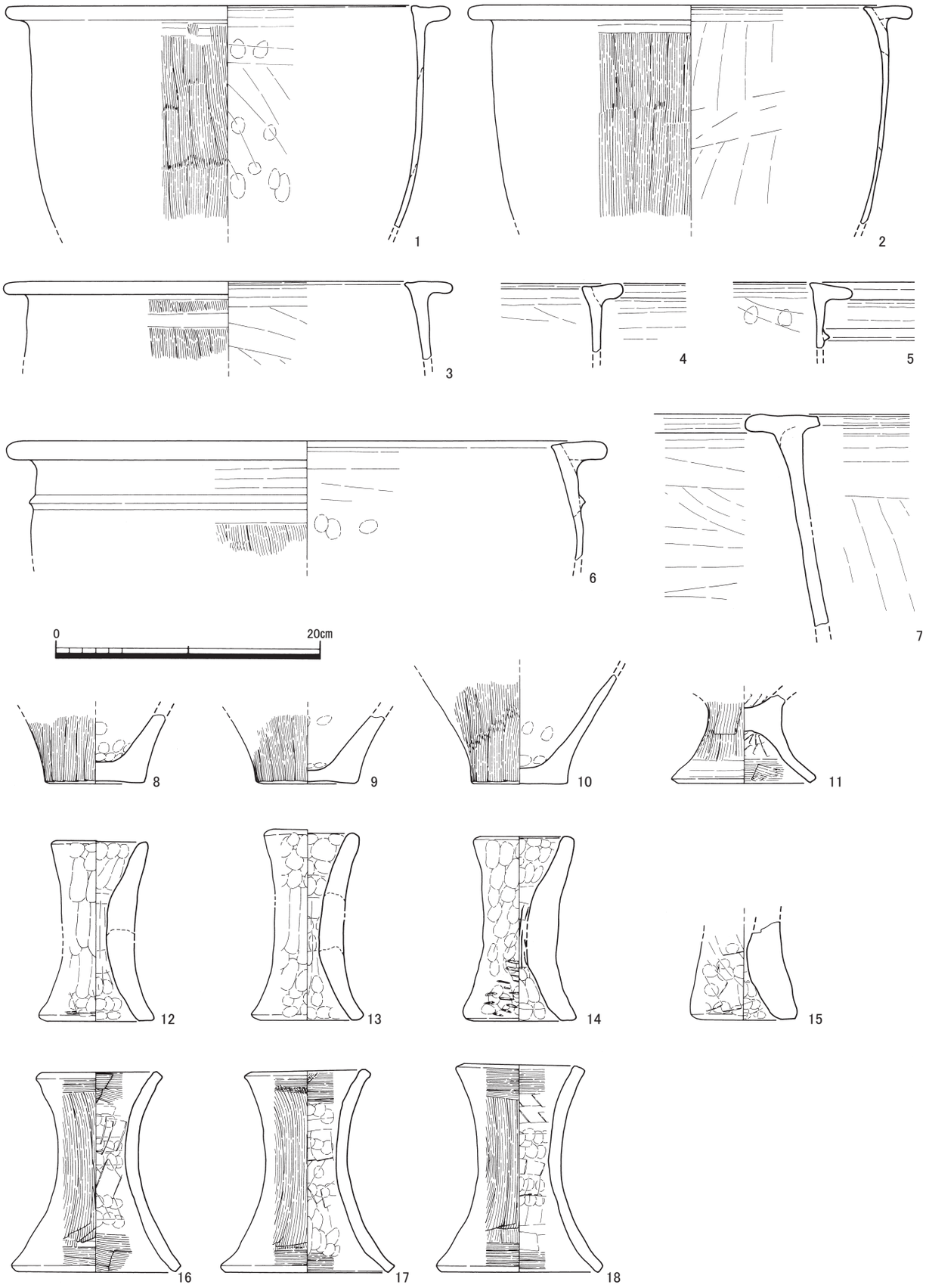
そのほか、黒曜石剥片が出土した。

３号土坑（第２・９図、図版６）

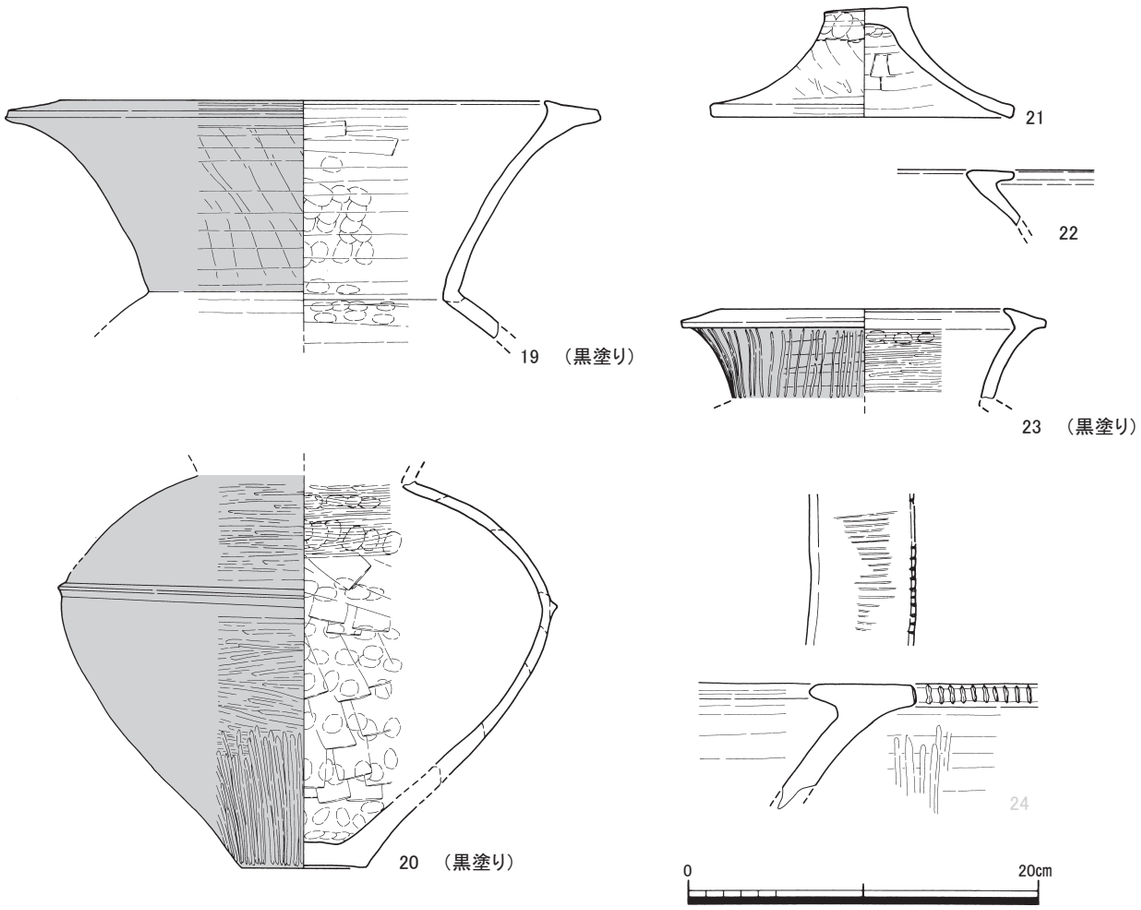
調査区の西側、標高 18.3 ｍで検出された。１号柵列に先行し、南側は別遺構（非常に深い柱穴）に切られている。長軸 1.6 ｍ、短軸 0.88 ｍの隅丸長方形状を呈し、検出面からの深さは、1m 程度である。北側では床面近くでえぐり込みがあり、内傾して立ち上がっているほかは、直に近い立ち上がりである。下層は黒色粘質シルトを主体とし、埋土中に大きな生粘土の塊が２箇所見られた。厚さは４～８㎝程度である。粘土塊の周囲には大きい炭片が多数見られた。また、下層からは支脚（出土状



第９図　３号土坑　実測図（ｓ＝１/20）



第10図　３号土坑出土土器実測図①（ｓ＝１／４）



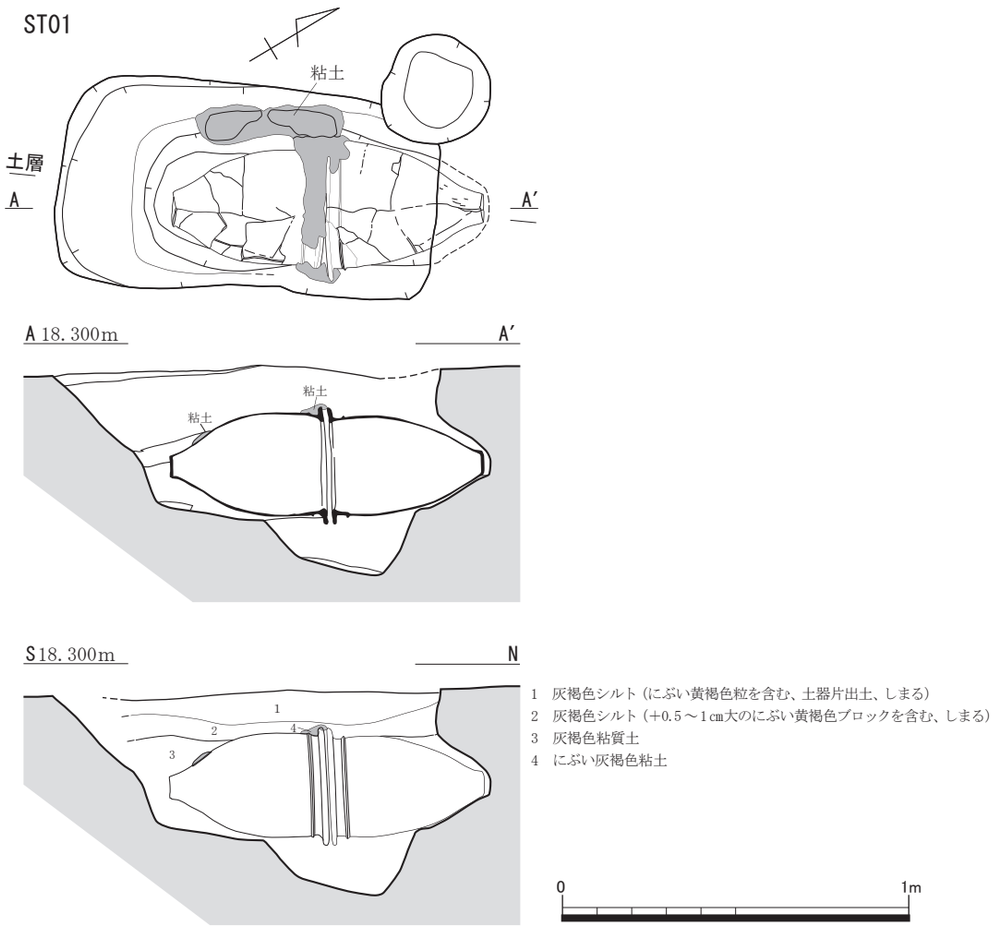
第 11 図　３号土坑出土土器実測図②（ｓ＝１／４）

況図⑯～㉑）が併せて出土しており、下層出土土器の内容と中･上層出土土器の様相が異なっている。中層から上層にかけては黒褐色～黒色シルトで土器片と共に焼土粒を多く含んでいる。中層から上層にかけて多くの土器が出土している（出土状況図①～⑮）。

出土遺物（第 10・11・14 図　図版 11 ～ 13）

弥生土器甕口縁部（第 10 図１～６）、汲田式甕棺口縁部（７）、弥生土器甕底部（８～ 10）、弥生土器高坏脚部（11）、弥生土器支脚（12 ～ 15）、弥生土器器台（16 ～ 18）、弥生土器広口壺口縁部～頸部（第 11 図 19）、弥生土器広口壺体部～底部（20）、弥生土器無頸壺蓋・口縁部（21・22）、弥生土器短頸壺口縁部～頸部（23）、弥生土器広口壺口縁部（24）が出土した。甕口縁部（１）は下層からの出土で最下層出土土器とも接合した。他に下層からの出土は短頸壺（23）、蓋（21）である。甕口縁部（２）が出土状況図④と⑬⑭、甕口縁部（３）が出土状況図⑪、甕口縁部（４）が出土状況図⑭、甕口縁部（５）が出土状況図⑫、甕口縁部（６）が出土状況図⑧、甕底部（８）が出土状況図⑩、甕底部（９）が出土状況図⑥、甕底部（10）が出土状況図⑨、高坏脚部が出土状況図⑤、支脚（12）が出土状況図⑱、支脚（13）が出土状況図⑳、支脚（14）が出土状況図⑰、支脚（15）が出土状況図⑲、器台（16）が出土状況図②、器台（17）が出土状況図①、器台（18）が出土状況図③、広口壺（19）が出土状況図⑦、広口壺（20）が出土状況図⑬に該当する。上層からの出土は、甕棺口縁部（７）、無頸壺口縁部（22）、広口壺口縁部（24）である。

広口壺(19)は内側に弱く突出する水平口縁を持ち黒塗りである。広口壺体部～底部(20)、短頸壺(23)も黒塗りである。広口壺口縁部（24）は鋤先口縁を持ち、口縁端部には刻目、口縁上部の平坦面には線刻、頸部には縦方向ミガキによる暗文がみられる。非常に口縁の径が大きい、大型壺である。



第 12 図　１号甕棺墓　実測図（ｓ＝１/20）

他に、菫青石ホルンフェルス製石庖丁（１）、石英斑岩製小形砥石（３）が出土した。石庖丁（１）はかなり風化しているが、紐ずれを確認した。刃こぼれは風化のため、はっきりしない。Ｂ面は粗い研磨段階で留まっている。砥石（３）は小形の方柱状のもので、下側は欠損している。主要面には浅くてやや砥石の軸と異なる長い凹みが確認できる。研面は４面確認できる。そのほか、土器焼成時の焼成破裂片が出土した。

（３）甕棺

１号甕棺墓（第２・12 図　図版７）

調査区東側、標高 18.2 ｍで検出した。墓壙の検出規模は 1.1 ｍ× 0.6 ｍの隅丸長方形を呈し、深さは 42㎝で、中央付近がさらに一段深く、18㎝程度下がる。接口式小児棺で、墓壙を斜め下方に掘り下げ、中央部分では一段深く下がるが、そこには土を充填して、北東壁で 16㎝程度横穴を掘り込んで下甕を挿入する。甕棺の主軸はＮ－ 30°－Ｅで、埋地角度はほぼ水平である。なお、墓壙南西側から出土した広口壺口縁部片が２号土坑出土広口壺（19：出土状況図⑪）と接合した。そのほか、埋土中から黒曜石剥片が出土した。

甕棺（第 13 図　図版 12）

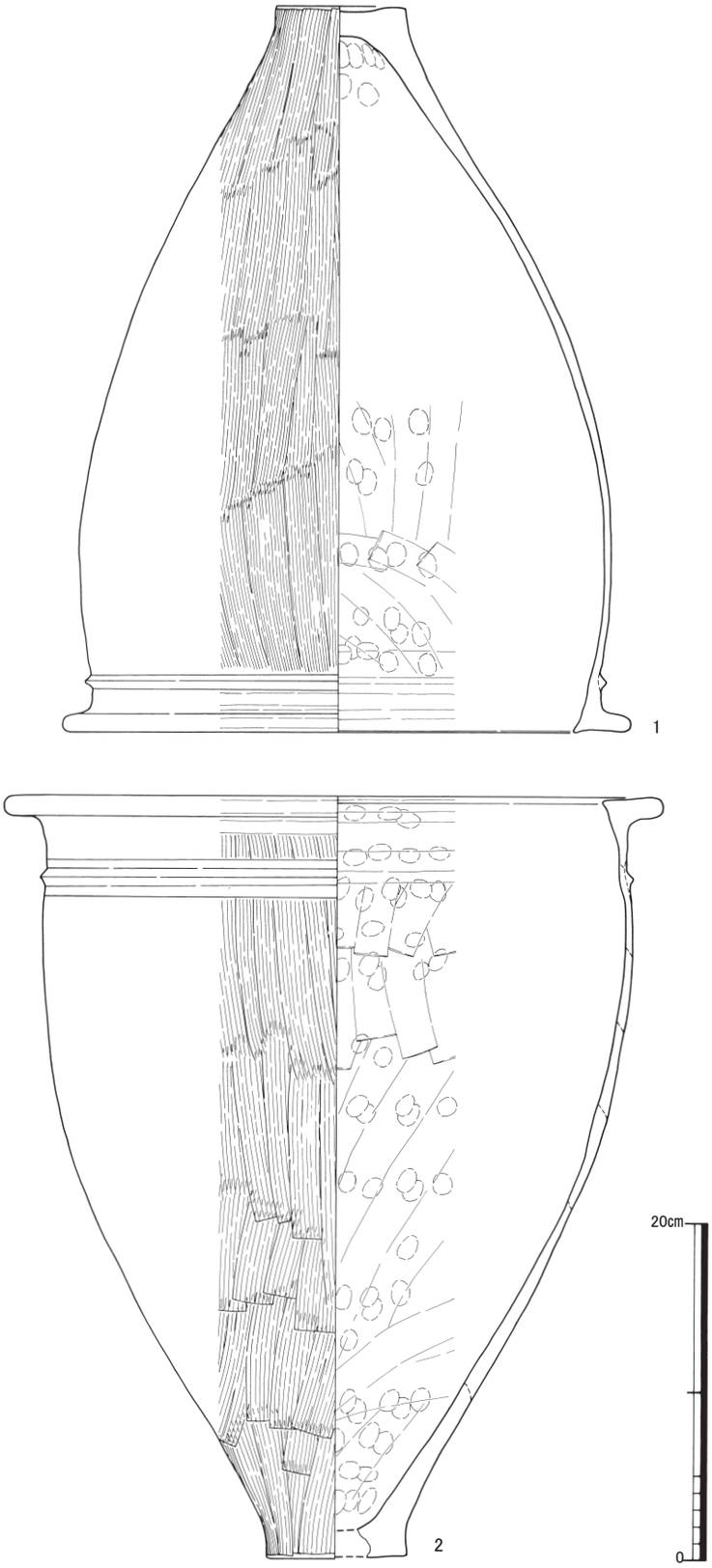
上甕　小形の甕である。口縁部はやや内側に突出する逆Ｌ字口縁である口縁下３㎝の位置に断面三

角形状の突帯を巡らしている。ほぼ完形で、口径 33.75㎝、器高 43.1㎝、底径 7.7㎝を測る。内面は指オサエ後板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く３㎜以下の砂粒をやや多く含む。色調は橙～にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。外面は煤の付着がみられ、底部付近は煤が飛んでいるが、下半上位には顕著に付着している。内面には胴部中位にコゲが確認できる。
下甕　小形の甕である。口縁部はやや内側に突出する逆Ｌ字口縁である口縁下５㎝の位置に断面三角形状の突帯を巡らしている。ほぼ完形で、口径 39.0㎝、器高 45.3㎝、底径 8.35㎝を測る。内面は指オサエ後板状工具ナデ、外面はハケメがみられる。胎土はやや粗く３㎜以下の砂粒をやや多く含む。色調はにぶい橙～にぶい黄橙色を呈し､焼成は良好である。外面は下半に顕著に煤の付着がみられる。底部外面にはかなり小径の種子圧痕がみられた。

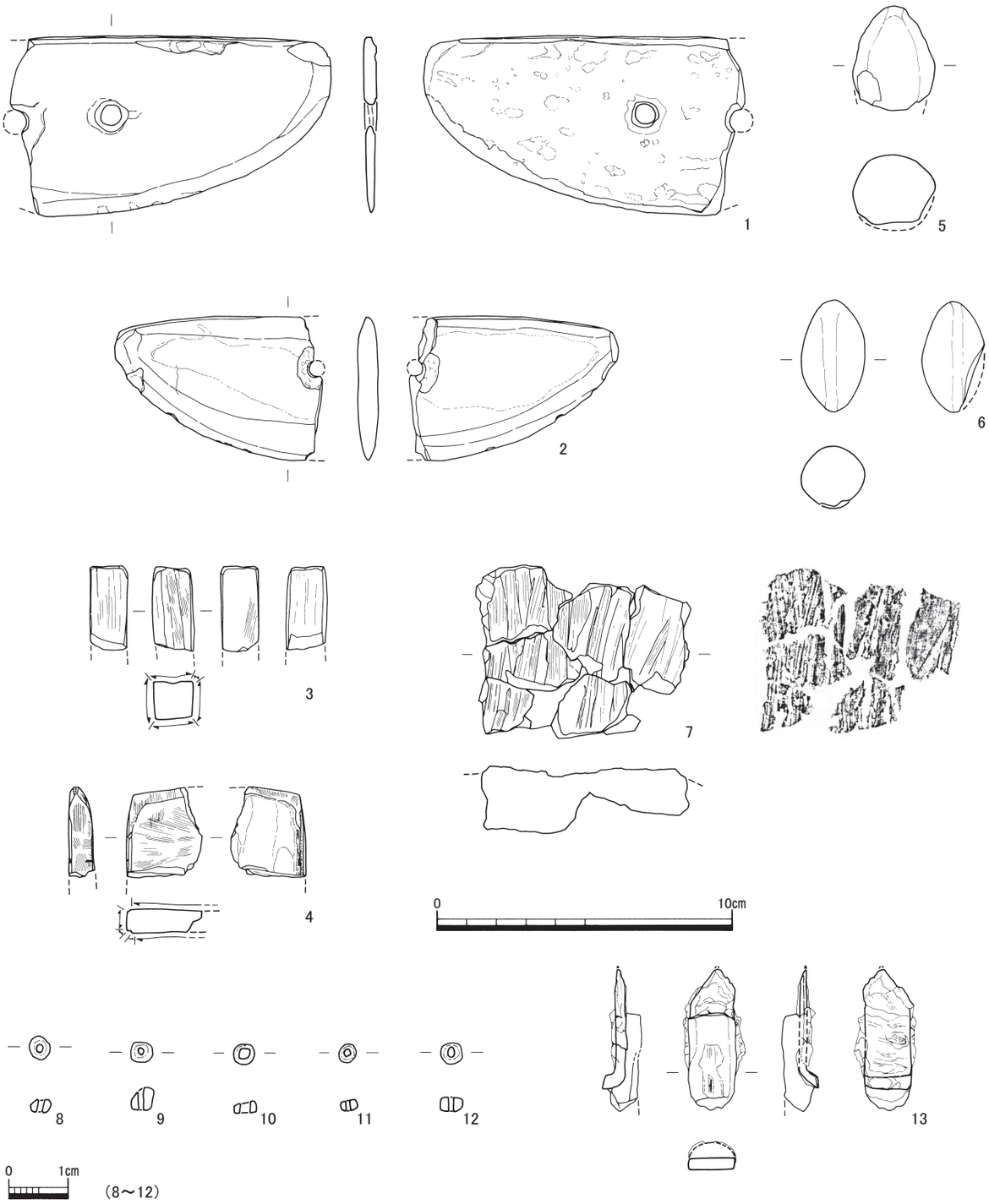
（４）溝状遺構

１号溝（周溝状遺構）（第２図、図版１）
　調査区南東隅、標高 18.3 ｍで検出した弧状溝である。ピットに切られ、東側と南側への延長は調査区外に及ぶ。検出長さ 3.8 ｍ、幅 25㎝程度、深さ 10 ～ 15㎝程度である。

出土遺物
　弥生土器小片が出土している。



第13図　1号甕棺　実測図（s＝1／4）



第14図　小郡若山遺跡９出土石器・土製品・ガラス製品・鉄器実測図（ｓ＝１／１，１／２）

２．奈良時代の遺構と遺物

（１）掘立柱建物

１号掘立柱建物（第２・15 図、図版８）

調査区東側、標高 18.4 ｍで検出した、２間×２間の総柱建物である。１・３・４号住居、１号甕棺墓より後出する。主軸をＮ－41°－Ｗにとる南北棟である。規模は桁行 3.8 ～ 3.9 ｍ、梁行 3.2 ～ 3.3m、桁間 1.8 ～ 2.0m、梁間 1.6 ～ 1.8m を測る。柱掘り方は不整円形～隅丸方形状を呈し、長軸 65 ～ 115㎝、短軸 42 ～ 78㎝、深さ 65 ～ 85㎝を測る。断面観察では、すべての柱の抜取痕が確認でき、底面には柱のあたりが残っているものがある。

出土遺物

Ｐ４から弥生時代の土製投弾が出土した。混入品である。そのほか、ピット埋土からはわずかに土師器小片も出土している。

（２）柵列

長方形状の掘り方を持つ柱穴が確認されたが、削平を受けており残存はわずかである。調査区内では建物を復元するには至らなかったため、柵列（柱列）として報告する。

１号柵列（第２・16 図、図版８）

調査区東側、標高 18.3 ｍで検出した、３号土坑より後出する。調査区内では２本の柱穴のみの確認である。主軸はＮ－２°－Ｗである。柱間 3.9m 程度である。柱掘り方は隅丸方形状を呈し、P1 は長軸 108㎝×短軸 96㎝、深さ 18㎝程度である。灰褐色～黒褐色シルトの埋土である。

出土遺物

P2 から土師器高台付坏底部小片が出土した。

２号柵列（第２・16 図、図版８）

調査区中央、標高 18.3 ｍで検出した、１・３号住居より後出する。調査区内では３本の柱穴のみの確認である。主軸はＮ－5.5°－Ｗである。柱間 3.0m 程度である。柱掘り方は隅丸方形状を呈し、P2 は長軸 102㎝×短軸 96㎝、深さ 20㎝程度である。黒褐色シルトの埋土でやや南寄りに柱痕が確認できる。

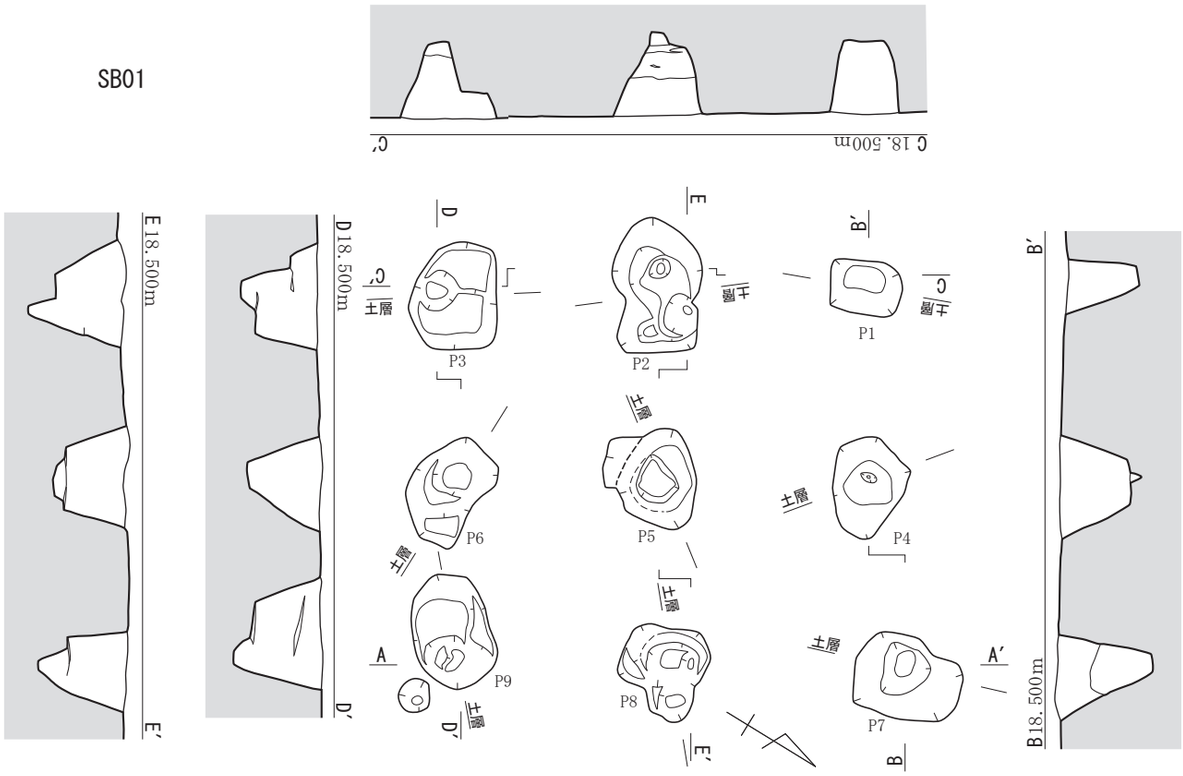
出土遺物はみられない。

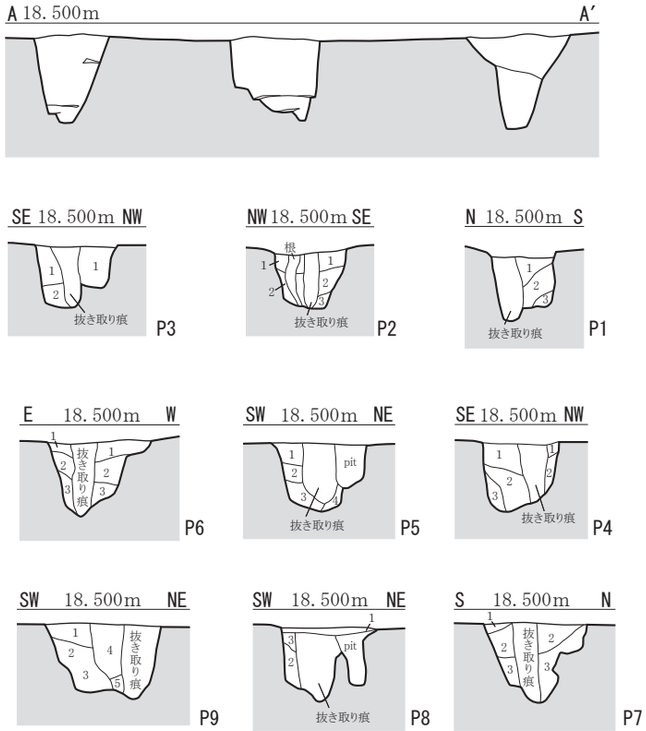
３号柵列（第２・16 図、図版１）

調査区北側、標高 18.0 ｍで検出した、調査区内では４本の柱穴のみの確認で北側の調査区外に広がる掘立柱建物も想定されるだろう。主軸はＮ－86°－Ｗである。柱間 1.8 ～ 2.1m である。柱掘り方は円形を呈し、直径 48 ～ 55㎝、深さ 36 ～ 48㎝である。黒褐色シルトの埋土である。

出土遺物

弥生土器小片が出土した。





P1
1 黒褐色砂質土（2.5Y3/2）
2 黒色粘質土（10YR1/2、黒褐色砂質土を含む）
3 黒色粘質土（10YR1/2、黒黄褐色粘土を多く含む）

P2
1 黒褐色土（1㎜以下の黄ブロックを含む）
2 黒褐色土
3 第2層＋茶褐色地山ブロック

P3
1 黒褐色土（0.5㎝大の黄ブロックを含む、しまる）
2 黒色土（しまる）

P4
1 黒色砂質土（10YR2/1）
2 黒色粘質土（10YR2/1、明黄褐色粘土ブロックを含む）
3 黒色粘質土（10YR3/2、明黄褐色粘土ブロックを含む）

P5
1 黒褐色砂質土（2.5Y3/2）
2 黒色粘質土（10YR2/1、明黄褐色粘土ブロックを少量含む）
3 黒色粘質土（10YR2/1）
4 黒褐色粘質土（2.5YR3/2）

P6
1 黒褐色砂質土（2.5Y3/1、黒色粘質土や明黄褐色粘土ブロックを含む）
2 黒褐色粘質土（2.5YR3/2、明黄褐色粘土ブロックを含む）
3 黒色粘質土（10YR2/1）

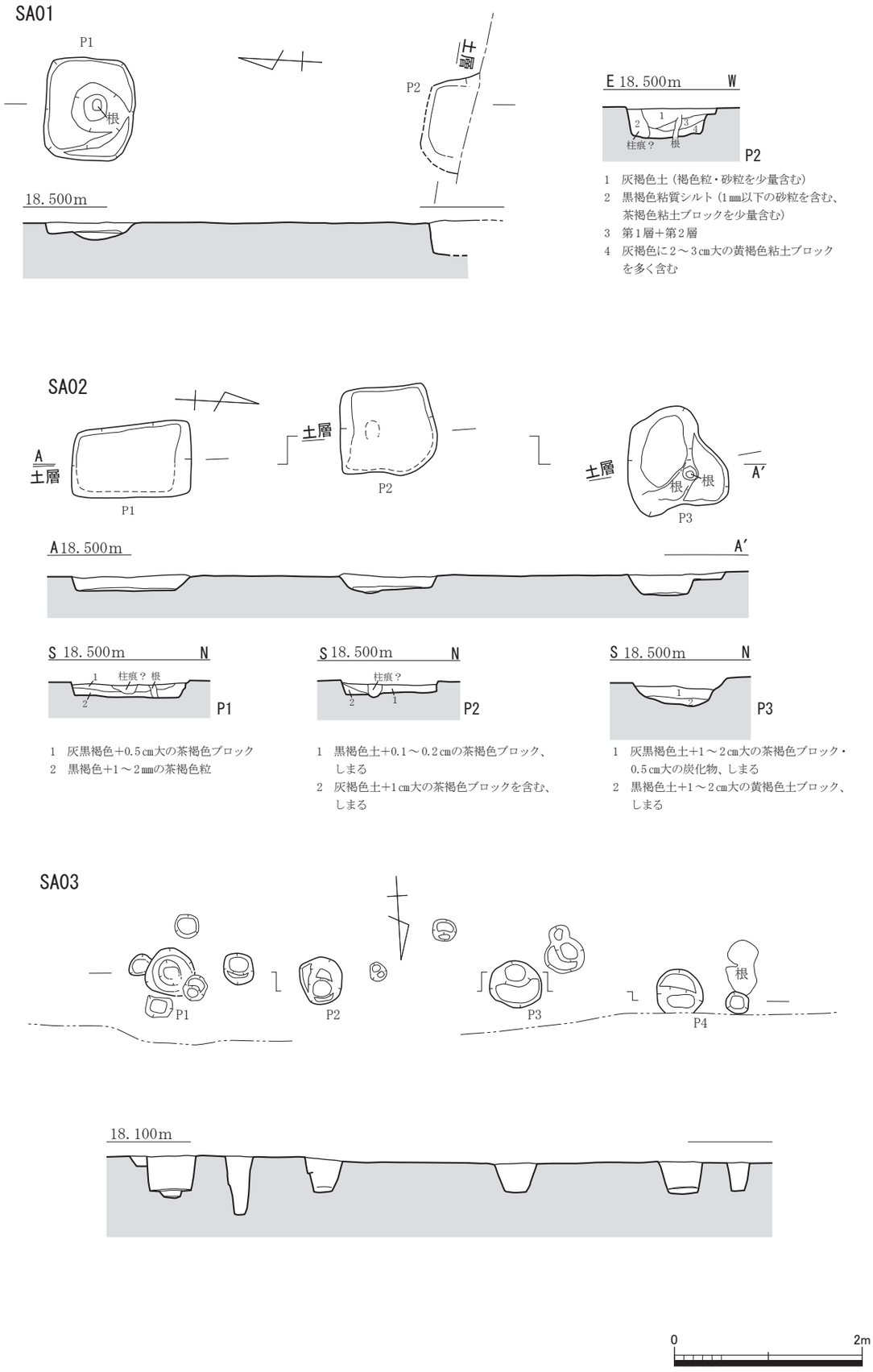
P7
1 灰黒褐色土（1㎜大のブロック土、しまる）
2 黒褐色土（＋3㎝大の黄褐色ブロックとシマ状に入る、しまる）
3 黒色土（＋1㎜以下のブロック土、しまる）

P8
1 黒褐色土
2 灰黒褐色土（しまりなし）
3 黒褐色土

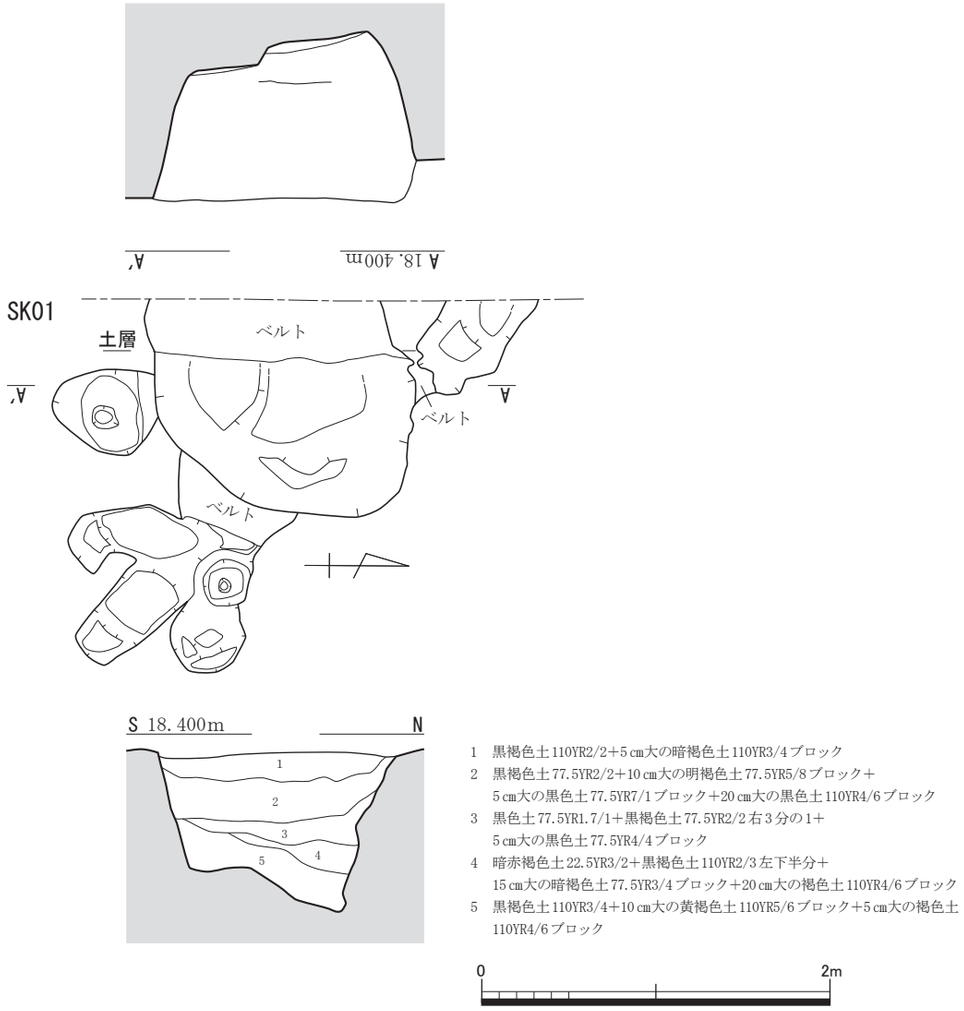
P9
1 黒褐色砂質土（2.5Y3/1）
2 黒色粘質土（2.5Y2/1、黒褐色粘土を含む）
3 黒色粘質土（2.5Y2/1）
4 黒褐色砂質土（2.5Y3/1、明黄褐色粘土ブロックを含む）
5 明黄褐色粘質土（10Y6/6）

0 2m

第15図　1号掘立柱建物　実測図（s＝1/60）



第16図　1・2号柵列　3号掘立柱建物　実測図（s＝1/60）



第17図　1号土坑　実測図（s = 1/40）

（2）土坑

1号土坑（第2・17図、図版6）

調査区北西隅に位置し、西側は調査区外に及ぶ。平面は隅丸方形、もしくは楕円形で、南北1.48m、東西1.2m以上、深さ98㎝を測る。壁面は南側と穂が市側にテラス面を持って階段状に立ち上がる。出土遺物は少なく、黄褐色粘土ブロックを多く含む黒褐色系の埋土である。

出土遺物

奈良時代の高坏脚部片が出土した。

第５章　調査成果のまとめ

１．小郡若山遺跡９の遺構変遷と構成

（１）遺構の時期と内容

各遺構の時期について検討する。１号住居跡はベッド状遺構を短辺に持つもので、床面付近から出土した土器から高三潴式新段階～下大隈式の時期が与えられる。屋内土坑出土甕下半部と 2.6 m離れたベッド状遺構付近で出土した甕上半部が接合し、住居廃絶時の様子を示している（第３図）。床面直上や床面付近の埋土中からガラス小玉５点が出土した。これまでにも弥生時代後期以降の住居埋土からガラス小玉が数点出土する事例が知られるが、本調査の１号住居跡からの出土状況からは、廃絶初期段階でガラス小玉を入れている（撒いている）状況が窺える。

３号住居跡は小判型を呈する住居である（第４図）。床面出土土器から須玖Ⅰ式新段階の時期が与えられ、床面からは柄付き鉄製ヤリガンナが出土した（第 14 図）。

３号住居跡に切られる４号住居跡は方形状の住居である（第４図）。屋内土坑から須玖Ⅰ式の土器が出土している。４号住居跡は１号甕棺にも切られている。１号甕棺は須玖Ⅰ式新段階の甕を棺体としており、小児棺にしては目貼り粘土が丁寧に充填されている（第 12 図）。階段状に墓壙を掘り込み、１段目と水平になる横穴を掘削し、下甕を挿入する。２段目の掘り込みは目貼り用の粘土を獲得するための可能性も考えられる。目貼り粘土は合わせ口の上面から側面、そして墓壙の西側にも分布しており、西側の粘土は余った粘土とも考えられる。

１号甕棺墓の墓壙南西側の埋土から出土した広口壺口縁部片が２号土坑下層出土広口壺（出土状況図⑪）と接合したので（第８図 19）、一時期の同時性がうかがえる。広口壺は黒塗りでほぼ完形に復原できる。

２号土坑からは、下層から中層にかけて多くの土器がまとまって出土している（第６図）。須玖Ⅰ式新段階の土器群が汲田式甕棺片を伴い、日常容器と甕棺の併行時期が窺える。３号土坑も同様に中層から上層にかけて多くの土器がまとまって出土した（第９図）。若干の時期幅があり、須玖Ⅰ式新段階から須玖Ⅱ式古段階の日常土器と汲田式甕棺片が出土している。

１号掘立柱建物・１～３号柱列の詳細時期は不明であるが、土師器片の出土から奈良時代の所産と推定される。

次に、土器の遺構間接合関係を確認しておく。

１号住居跡では、屋内土坑 SK01 出土甕下半部とベッド状遺構付近で出土した甕上半部が接合しており（第５図２）、住居廃絶時に屋内土坑からベッド状遺構までは 2.6 mの距離があるが（第３図）、その一帯に土器の廃棄が行われている。

さらには、１号甕棺墓と２号土坑出土土器の接合関係が確認できた（第６図 19）。２号土坑は各種の土器がまとめて投棄された状態で確認され、いわゆる「祭祀土坑」とよばれる遺構である（第６図）。２号土坑には、甕、壺、器台、支脚、鉢などの各種土器が集中して出土した。土坑出土土器のすべてが完形に復原されるわけではない。逞しく推測すれば、小児棺を設置して埋める際に、儀礼（飲食も伴う？）を行い、そのときに使用した土器等を２号土坑にまとめて投棄したことも考えられる。単なる「祭祀土坑」が一つの具体的なイメージを持つ可能性があり、このような周辺遺構との接合関係は非常に重要であろう。今回の調査区は矮小であり、同時併存した遺構群が広域には明らかにはなっていないが、一時期的な集落景観の復元を試みることによって、当時の信仰や社会を考古学が復元できる可能性を有していると思われる。

２.３号住居跡出土柄付きヤリガンナについて

３号住居跡出土柄付き鉄製ヤリガンナは注目される資料である。共伴土器から須玖Ⅰ式新段階の鉄器資料で比較的古い時期のものである。鉄製ヤリガンナ資料はＸ線写真を撮ることによって着装基部で鉄素材が短く屈曲する部分が観察できた。また、柄が良好に残っており、取り付けの状態が推測できることも重要である。

木質は表側に残っており、断面はかまぼこ状である（縦方向に木質繊維が走る）。鉄製ヤリガンナの幅とほぼ同じくらいの柄の幅となっている。また、屈曲部にあわせて柄もくりぬいて成形されていることが窺える。柄の上端は成形・使用時の面を残しているが、下端は破損しており、本来はもう少し長さがあったものと考えられる。鉄製ヤリガンナの裏側にも木質部位（錆についた圧痕から横方向の柾目か）を添えて、桜皮等で縛ったと考えられる。

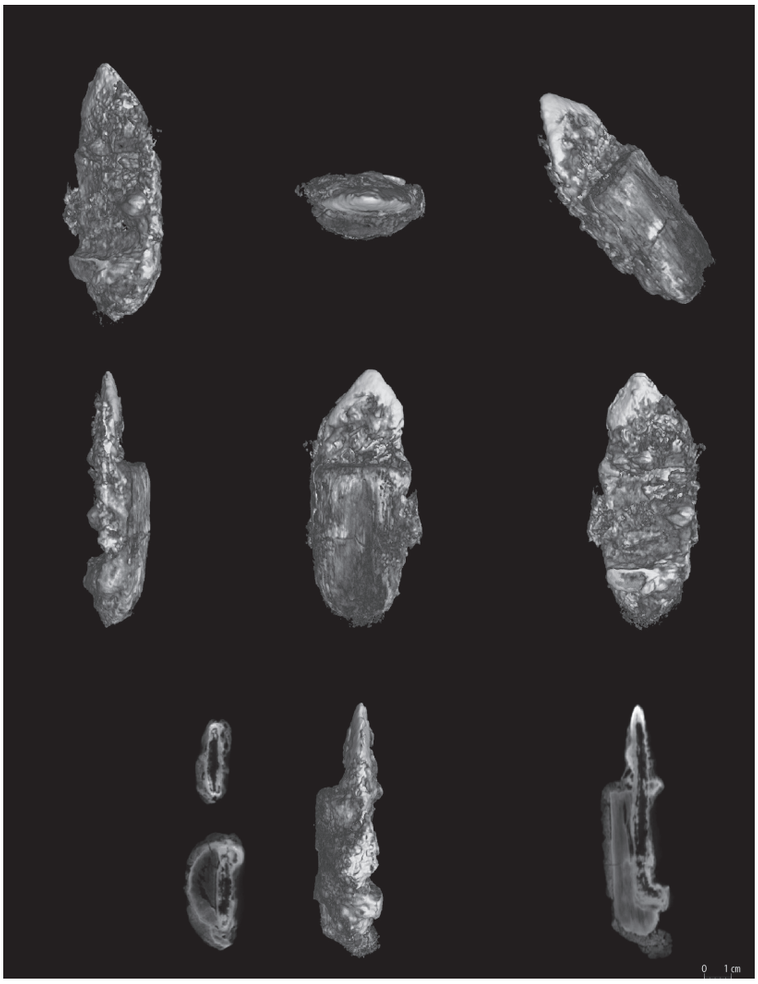
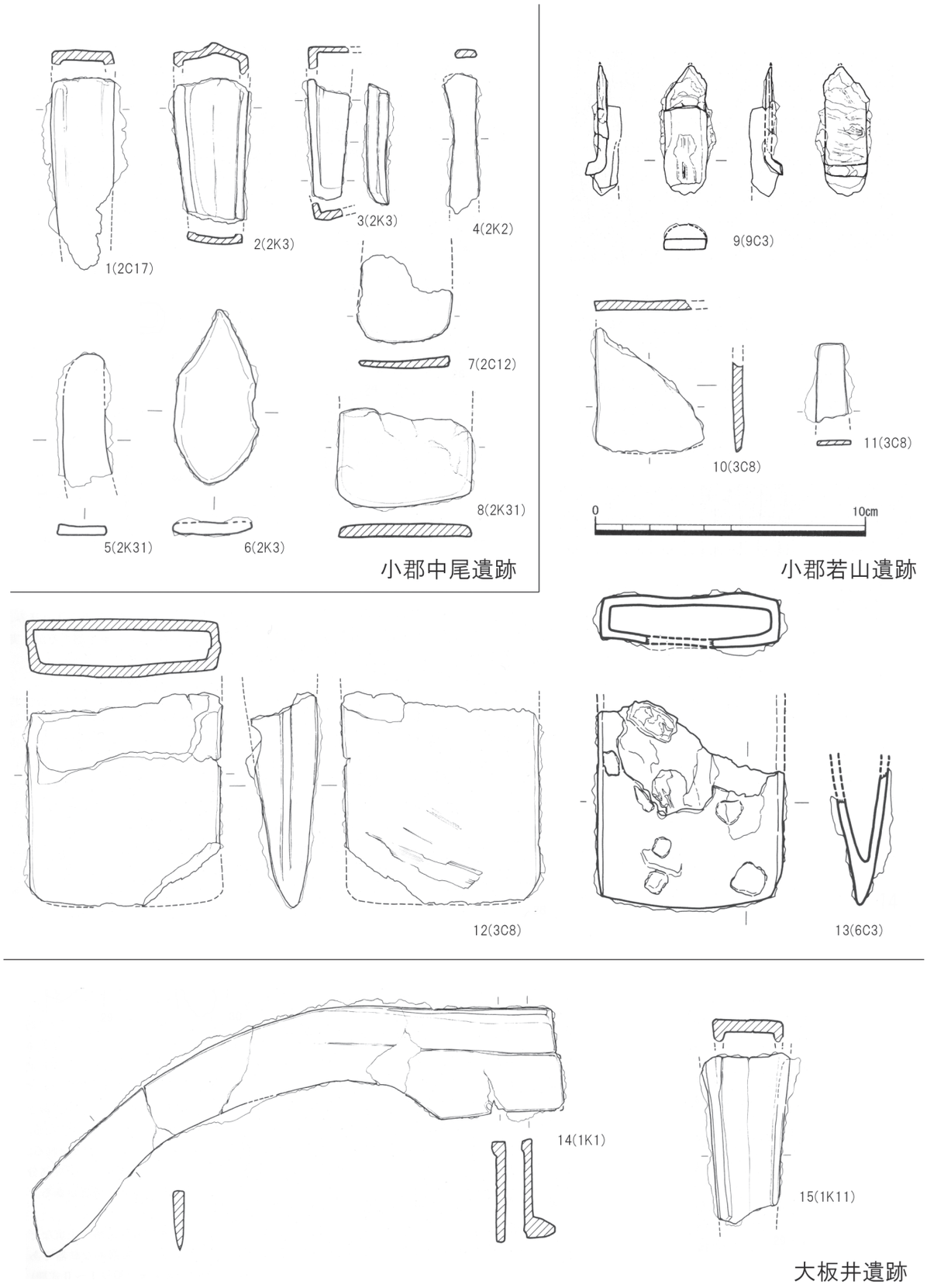


写真１　小郡若山遺跡９出土柄付き鉄製ﾔﾘｶﾞﾝﾅ CT 画像

鉄製ヤリガンナの刃先は、本来もう少し長さがあったと思われるが、使用により短くなっている。刃先は一部欠損している。現状で刃の付け方は右側が短く（1.1㎝）、左側がやや長い（1.5㎝）。柄を入れた残存長さ 4.7㎝、幅 2.1㎝、高さ 1.3㎝、重さ 10.8 ｇである。鉄の身の厚さは 0.35㎝である。

このヤリガンナは、一つの可能性として鋳造鉄斧の側面から主面に至る破片の再加工品で、側面部分の屈曲部を基部に、鉄斧上面の平坦面を刃部に配置したものと考えた。しかし、鋳造鉄斧破片を利用した利器やヤリガンナの例はこれまでにもいくつか知られるが、鋳造鉄斧の側面から主面に至る破片利用の資料はなく、即断はできない。鉄板から屈曲部を再加工したものとも考えられるし、鋳造ではなく、鍛造の可能性も残されている。

本資料は、青銅製のヤリガンナと共通する刃の形状を持っており、青銅製ヤリガンナの影響を強く受けている。通常の鉄ヤリガンナでみられる柳葉形の刃先や断面形状の裏側がくぼんで緩いカーブを持つ「ウラスキ」の形状とは異なっている。最近、石川県八日市地方遺跡で出土した柄付き鉄ヤリガンナが注目をされたが、そのヤリガンナも小郡若山遺跡９出土の鉄ヤリガンナと同様に、刃先は青銅製ヤリガンナに共通し、「ウラスキ」を持たない形状であった。双方とも木工具が青銅製から鉄製へと移り変わる過渡的な段階をよく示す資料と考えられる。朝鮮半島で原三国時代に出土する鉄ヤリガンナはやはりこの「ウラスキ」を持つので、青銅製ヤリガンナの形状と類似する日本列島出土の鉄ヤリガンナは日本列島での木工具の特徴や鉄素材獲得の状況を反映しているものと考えられる。



第18図　小郡若山遺跡・小郡中尾遺跡・大板井遺跡出土初期鉄器(s＝１／２)

第18図は小郡若山遺跡周辺で出土した弥生時代中期前半を中心とした時期の鉄製品である。野島永氏によって、全国的な初期鉄器の集成があり、その判断を基にした（野島2008）。特にこの時期の鉄器片は、両側縁あるいは一方が短く折れ曲がるものや双合范の鋳バリが確認されるものがあり、これらは中国戦国時代の燕地域の鋳造鉄斧の破片であることが指摘されている（野島1992）。小郡市でもそれらの鉄製品が多く確認されている。

小郡中尾遺跡２次調査の弥生時代中期前半代の資料（中期後半代の可能性があるものを含む）は、SC12出土鉄板破片（７）は層状に錆化していることから鍛造によるものと判断された（野島2008）。（８）はSK31から出土した鉄板である。鋳造鉄斧主面破片の可能性が高い。

SC17出土は須玖Ⅰ新～須玖Ⅱ式の資料である。鋳造鉄斧袋部側面破片（１）。（２・３）はSK03出土の鋳造鉄斧袋部側面破片で、（２）は下端部分が研磨され、鉄鑿として使用されたものとみられる。（４）はSK02出土の薄い鉄板で鋳造鉄器と考えられる。そのほか、SK31より鉄板（５）SK03より鉄板（６）が出土している。

小郡若山遺跡では、３次８号住居（須玖Ⅰ式）より鉄器が出土している。（10）は扁平な鉄板で、層状の錆化が確認され鍛造品の可能性が高いと判断された（野島2008）。（11）も鍛造鉄器片、あるいは鉄板片と考えられる。（12）は小型の鋳造鉄斧である。現存長さ7.9㎝、幅7.2㎝、側面の器厚さは4.3mmから4.7mmである。双合范の合わせ目が明瞭にのこっている。（13）は同じく、小型の鋳造鉄斧で、SC03の中央土坑より出土（須玖Ⅰ式～Ⅱ式古）。現存長6.3㎝、幅6.3㎝、側面の器厚は4mm前後である。

大板井遺跡では、Ⅰ区１号祭祀土坑の床面から出土した鉄鎌（14）である。須玖Ⅰ～Ⅱ式古にかけての土器群の下から出土した。全長は20㎝程度で、基部に木柄を装着するための折り返しがなく、背側に隆起帯をもっている。基部の刃部側端部に高さ８mmの突起が取りつく。

松井和幸は鋳造品を脱炭した鉄器であることを想定している（松井2001）。また、鋳造鉄斧袋部側面の破片、あるいはそのほかの鋳造鉄器の破片を、刃部となる先端部鉄板材と鍛接したものとの想定もされている（野島2008）。（15）はⅠ区11号祭祀土坑からの出土。須玖Ⅰ式～Ⅱ式古の土器と共に出土した。鋳造鉄斧袋部側面の破片と考えられる。

以上のように、小郡若山遺跡周辺では、弥生時代中期前半を中心とする初期鉄器資料が比較的多く確認されている。今後、所属時期の詳細を確認し、当地域における集落動向とともに鋳造鉄斧やその破片の流入、利器としての再加工の様相について検討しなければならないだろう。

小郡若山遺跡9　遺物観察表

法量＝口:口径、高:器高、底:底径、体:体部最大径、天:天頂部径、受:受部径、脚・裾:脚裾部径
器種＝弥:弥生土器

挿図番号	図版番号	出土遺構		器種	法量cm・（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考
第5図1	–	SC1	上層東半	弥・壺	残存高:17.7 体:(29.2)	橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	頸・内、体・内:板状工具ﾅﾃﾞ 頸・外～体・外:ﾊｹﾒ 頸・内、突:ﾖｺﾅﾃﾞ	SC1床直東半・東半下層出土片と接合。 体部内面上位に黒斑。
第5図2	10	SC1	土器①＋内SK1土器1	弥・甕	口:14.1 残存高:15.6 ＋11.5	内:浅黄橙色 外:黄橙～にぶい黄橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口・端～口・外、頸・内:ﾖｺﾅﾃﾞ 口・内:器表摩滅のため調整不明 体・内～底・内:ﾊｹﾒ 体・外:上半はﾊｹﾒ、下半はﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾊｹﾒ 底・外:ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	SC1下層西半、SC2南半出土片と接合。 体部外面上位に黒斑。
第5図3	10	SC1	土器④	弥・台付甕	口:14.35 高:20.95 脚:12.7	内:灰白～にぶい黄橙色 外:灰白～浅黄橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内、脚:ﾊｹﾒ 体・外:ﾊｹﾒ、中位～下位はﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾊｹﾒ 底・外:ﾅﾃﾞ	SC1床直・西側・北半出土片と接合。 脚部内面に黒斑。
第5図4	10	SC1	土器③	弥・甕	口:(27.6) 残存高:10.35	内:にぶい黄橙色 外:浅黄橙色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:器表摩滅のため調整不明 体・外:ﾊｹﾒ、器表摩滅のため不鮮明	SC1西側出土片と接合。 口縁部外面～体部外面にｽｽ。
第5図5	–	SC1	内SK1土器②とその他	弥・壺	残存高:7.2 底:8.4	内:にぶい黄褐色 外:浅黄橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	体・内:板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ 底・内:ﾅﾃﾞ 底・外:ﾍﾗｹｽﾞﾘ後ﾅﾃﾞ	
第5図6	–	SC1	下層西半	弥・手捏ね	口:(4.0) 高:2.4	内:浅黄橙色 外:浅黄橙～にぶい黄橙色	ほぼ密 径1mm以下の砂粒を少し含む。	良	ﾅﾃﾞ・指頭圧痕	
第5図7	10	SC3	南半	弥・甕	口:(33.7) 残存高:8.6	内:にぶい橙～にぶい黄橙色 外:浅黄橙～にぶい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口、突:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	
第5図8	–	SC3	上層	弥・器台	高柱:(9.5) 残存高:8.05	内:にぶい黄橙色 外:にぶい橙～にぶい黄橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾊｹﾒ・ﾖｺﾅﾃﾞ・板状工具ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ　外:ﾊｹﾒ	
第5図9	–	SC3	上層	弥・甕	残存高:5.8 底:7.65	にぶい黄橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・内:板状工具ﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ 底:ﾅﾃﾞ	SC1貼床出土片と接合。 底部外面にｽｻ圧痕：黒斑。
第5図10	–	SC3	土器④	弥・甕	残存高:4.35 底:7.15	内:にぶい橙～褐灰色 外:にぶい橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外:ﾊｹﾒ 他はﾅﾃﾞ	
第5図11	10	SC3	土器⑤	弥・壺	口:(20.1) 残存高:5.45	にぶい橙色	やや粗 径10mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 頸:ﾍﾗﾐｶﾞｷ、器表摩滅のため不鮮明	
第5図12	–	SC3	土器③	弥・壺	残存高:3.9	橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 頸・内:ﾍﾗﾐｶﾞｷ、器表摩滅のため不鮮明 頸・外:器表摩滅のため調整不明	
第5図13	–	SC3	南半	弥・広口壺	残存高:4.4	橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 頸・内:器表摩滅のため調整不明 頸・外:ﾍﾗﾐｶﾞｷ、器表摩滅のため不鮮明	
第5図14	10	SC4	SK1内土器	弥・甕	口:(35.4) 残存高:17.7	内:明赤褐～にぶい黄色 外:にぶい橙～橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位は板状工具ﾅﾃﾞ、中位は器表摩滅のため調整不明 体・外:ﾊｹﾒ	SC4屋内SK1出土片と接合。 体部外面上位にｽｽ。
第5図15	–	SC4	屋内SK1	弥・甕	残存高:4.45 底:(8.2)	内:にぶい橙色 外:浅黄橙～にぶい黄橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・内:板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ 底:ﾅﾃﾞ	
第7図1	10	SK2	土器⑰	弥・甕	口:29.9 残存高:17.0	内:明褐色 外:にぶい橙～にぶい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	SK2上層東半・下層出土片、土器⑧・⑨・⑪と接合。 頸部外面にｽｽ。
第7図2	–	SK2	土器③	弥・甕	口:(32.7) 残存高:18.6	内:橙～にぶい赤褐色 外:にぶい橙色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	
第7図3	–	SK2	土器⑰	弥・甕	口:(32.1) 残存高:2.6	内:灰黄褐色 外:橙色	粗 径7mm以下の砂粒を多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ	
第7図4	–	SK2	土器⑫	弥・甕	口:(31.4) 残存高:6.1	にぶい橙～橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:器表摩滅のため調整不明 体・外:ﾊｹﾒ、器表摩滅のため不鮮明	SK2下層出土片と接合。
第7図5	–	SK2	上層	弥・甕	口:(28.2) 残存高:14.0	内:にぶい褐～にぶい橙色 外:浅黄橙～にぶい橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位はﾊｹﾒ、他は板状工具ﾅﾃﾞ　体・外:ﾊｹﾒ	
第7図6	–	SK2	中層土器群	弥・甕	残存高:15.85	内:にぶい橙色 外:にぶい橙～にぶい褐色	粗 径5mm以下の砂粒を多く含む	良	口～突:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	体部外面にｽｽ。
第7図7	10	SK2	土器⑥	弥・甕	残存高:18.9 底:7.1	内:にぶい黄橙～暗灰黄色 外:にぶい褐～にぶい黄橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	体・内:器表摩滅のため調整不明 体・外:ﾊｹﾒ 底:ﾅﾃﾞ	SK2下層東半、上層北半出土片と接合。 底部内面にｺｹﾞ、体部外面にｽｽ。
第7図8	–	SK2	上層	弥・甕	残存高:5.6 底:7.5	内:にぶい橙色 外:にぶい褐～にぶい橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	体・内～底・内:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ 底・外:ﾅﾃﾞ	体部外面にｽｽ。

挿図番号	図版番号	出土遺構		器種	法量cm・（復元値）	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考
第7図9	－	SK02	土器⑤	弥・甕	残存高:11.3 底:7.7	内:橙～黄灰色 外:橙～にぶい黄褐色	粗 径4mm以下の砂粒を多く含む	良	体・内:器表摩滅のため調整不明 体・外:ﾊｹﾒ 底:ﾅﾃﾞ	SK2下層出土片と接合。 底部内面にｺｹﾞ残存。
第7図10	－		上層	弥・甕	残存高:2.6	内:にぶい黄橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	ﾖｺﾅﾃﾞ	
第7図11	－		土器⑦	弥・蓋	天:6.1 残存高:6.8	内:にぶい赤褐色 外:橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外:ﾊｹﾒ 他はﾅﾃﾞ	
第7図12	－		下層	弥・鉢	残存高:5.05	にぶい橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外:上位jはﾊｹﾒ 他はﾖｺﾅﾃﾞ	内面に黒斑。
第7図13	－		下層	弥・高杯？	口:(12.2) 残存高:6.3	内:にぶい褐色 外:明褐色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	器表摩滅のため調整不明	底部内面に黒斑。
第7図14	10		土器①	弥・支脚	受:7.05 高:14.55 底:7.85	内:灰黄褐色 外:橙～にぶい橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	受・端、底・端::ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位は板状工具ﾅﾃﾞ・中位～下位はﾖｺﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ	
第7図15	11		土器④	弥・支脚	残存高:11.95 底:8.4	内:にぶい橙色 外:にぶい橙～にぶい黄橙色	やや粗 径17mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外:ﾊｹﾒ後ﾅﾃﾞ 他はﾖｺﾅﾃﾞ・ﾅﾃﾞ	
第7図16	10		土器⑩	弥・器台	受:8.1 高:14.15 底:10.0	橙～にぶい橙色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	受・端、底・端::ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾊｹﾒ、中位はﾅﾃﾞ　体・外:ﾊｹﾒ、上位はその後板状工具ﾅﾃﾞ、下位はその後ﾖｺﾅﾃﾞ	底部端部にわずかにｽｽ？
第7図17	－		土器⑭	弥・器台	受:8.5 高:14.45 底:10.15	内:にぶい橙～褐灰色 外:橙～にぶい橙色	粗 径2mm以下の砂粒を多く含む	良	受・端、底・端::ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾊｹﾒ、中位はﾅﾃﾞ・板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	
第7図18	10		土器⑮	弥・器台	受:8.4 高:14.6 底:9.8	内:褐灰～にぶい橙色 外:にぶい橙～橙色	粗 径4mm以下の砂粒を多く含む	良	受・端、底・端::ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾊｹﾒ、中位はﾅﾃﾞ・板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ、上位と下位はその後板状工具ﾅﾃﾞ	
第8図19	11		土器⑪	弥・広口壺	口:16.1 高:21.6 頸:10.4 体:21.9 底:6.1	内:橙～にぶい黄橙色 外:にぶい橙色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口・端、突:ﾖｺﾅﾃﾞ 内:ﾍﾗﾐｶﾞｷ 口・外:ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾍﾗﾐｶﾞｷ 体・内:上位は板状工具ﾅﾃﾞ、一部その後ﾊｹﾒ、中位～下位はﾅﾃﾞ 体・外:上半はﾍﾗﾐｶﾞｷ、器表摩滅のため不鮮明、下半は器表摩滅のため調整不明 底・内:ﾅﾃﾞ 底・外:器表摩滅のため調整不明	SK2下層・ST1南側出土片と接合。 黒色磨研土器。 体部外面下位～底部外面に黒斑。
第8図20	11		土器⑧	弥・広口壺	口:(28.9) 残存高:21.5 頸:(17.2) 体:(25.7)	内:橙～にぶい橙色　外:橙～明赤褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口・端、突:ﾖｺﾅﾃﾞ 口、体・外:ﾍﾗﾐｶﾞｷ 体・内:板状工具ﾅﾃﾞ	SK2上半東半・上層北半・中層土器群・下層・下層北半・下層北半土器だまり・ST1出土片、SK2土器⑬と接合。 丹塗磨研土器？
第8図21	11		土器②	弥・広口壺	口:23.55 高:33.9 頸:20.0 体:31.9 底:7.75	内:にぶい橙～橙色　外:にぶい橙～にぶい褐色	粗 径10mm以下の砂粒を多く含む	良	口:打ち欠き 口・内:ﾍﾗﾐｶﾞｷ 口・外:ﾍﾗﾐｶﾞｷ、器表摩滅のため不鮮明 体・内:上半は器表摩滅のため調整不明、下半は板状工具ﾅﾃﾞ、器表摩滅のため不鮮明 体・外:ﾍﾗﾐｶﾞｷ、器表摩滅のため不鮮明 底・内:ﾅﾃﾞ 底・外:器表摩滅のため調整不明	SK2東半上層・下層出土片、土器⑤と接合。 黒色磨研土器？ 体部上半を窓状に打ち欠き。
第10図1	11	SK3	下層	弥・甕	口:(33.6) 残存高:16.8	内:橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口～頸:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	SK3最下層出土片と接合。
第10図2	11		土器④	弥・甕	口:(33.6) 残存高:16.45	内:にぶい橙～灰褐色 外:にぶい橙～にぶい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	口縁部端部・体部外面にｽｽ。
第10図3	－		土器⑪	弥・甕	口:(34.0) 残存高:5.9	にぶい橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	
第10図4	－		土器⑭	弥・甕	残存高:5.1	内:にぶい橙色 外:にぶい橙～灰褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口～体・外:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ	口縁部端部～体部外面にｽｽ。
第10図5	－		土器⑫	弥・甕	残存高:5.05	内:黄灰色 外:にぶい橙色	やや粗 径4mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口～突:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ	口縁部端部～体部内面に黒斑。口縁部外面にｽｽ。
第10図6	－		土器⑧	弥・甕	口:(25.3) 残存高:8.95	内:灰黄褐～浅黄橙色 外:浅黄橙～淡黄色	粗 径3mm以下の砂粒を多く含む	良	口～突:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	口縁部に黒斑。

挿図番号	図版番号	出土遺構		器種	法量cm・(復元値)	色調	胎土	焼成	成形・調整方法	備考
第10図7	–	SK03	上層西半	弥・甕棺	残存高:16.15	内:にぶい黄橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径6mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:ﾅﾃﾞ・ﾖｺﾅﾃﾞ 体・外:ﾅﾃﾞ	
第10図8	–	SK03	土器⑩	弥・甕	残存高:5.1 底:9.55	内:にぶい橙色 外:にぶい橙～橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・外:ﾊｹﾒ 他はﾅﾃﾞ	体部外面にｽｽ。
第10図9	–	SK03	土器⑥	弥・甕	残存高:5.1 底:(7.6)	内:にぶい橙～橙色　外:にぶい橙色	粗 径5mm以下の砂粒を多く含む	良	体・内～底・内:器表摩滅のため調整不明 体・外:ﾊｹﾒ 底・外:ﾅﾃﾞ	体部内面はｺｹﾞ。
第10図10	–	SK03	土器⑨	弥・甕	残存高:8.25 底:7.4	内:にぶい黄橙色 外:浅黄橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・内:板状工具ﾅﾃﾞ、器表摩滅のため不鮮明 体・外:ﾊｹﾒ 底:ﾅﾃﾞ	体部内面下位に黒斑、底部内面にｺｹﾞ。
第10図11	–	SK03	土器⑤	弥・高杯	残存高:6.6 脚・裾:10.9	脚・内:にぶい黄褐～灰黄褐色 脚・外:にぶい橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	杯・内:板状工具ｵｼｱﾃﾖｺﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ 脚・内:上半は板状工具ｵｼｱﾃﾖｺﾅﾃﾞ、下半はﾊｹﾒ 脚・外:ﾖｺﾅﾃﾞ後上位～中位はﾊｹﾒ	杯部内面にｽｽ。 脚部外面に黒斑。
第10図12	11	SK03	土器⑱	弥・支脚	受:7.85 高:13.6 底:8.75	内:にぶい褐～にぶい橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	受・端、底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾅﾃﾞ、中位はﾖｺﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ 体・外:ﾅﾃﾞ	体部外面上位に黒斑。
第10図13	11	SK03	土器⑳	弥・支脚	受:7.2 高:14.5 底:(8.45)	内:にぶい橙～にぶい褐色 外:にぶい橙～にぶい黄橙色	やや粗 径8mm以下の砂粒をやや多く含む	良	受・端、底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾅﾃﾞ、中位はﾖｺﾅﾃﾞ 体・外:ﾅﾃﾞ	
第10図14	11	SK03	土器⑰	弥・支脚	受:7.6 高:14.0 底:8.55	内:橙～灰黄褐色 外:浅黄橙色	やや粗 径11mm以下の砂粒をやや多く含む	良	受・端、底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾅﾃﾞ、中位はﾖｺﾅﾃﾞ 体・外:ﾅﾃﾞ	体部外面下位に爪痕。
第10図15	12	SK03	土器⑲	弥・支脚	残存高:7.4 底:8.1	にぶい黄橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・内:中位はﾅﾃﾞ後板状工具ﾅﾃﾞ、下位はﾅﾃﾞ 体・外:板状工具ﾅﾃﾞ後ﾅﾃﾞ 底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ	体部外面中位にｽｽ。
第10図16	11	SK03	土器②	弥・器台	受:9.6 高:15.2 底:12.85	にぶい橙～橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	受・端、底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾊｹﾒ、中位はﾖｺﾅﾃﾞ後板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	体部外面下位に黒斑。
第10図17	11	SK03	土器①	弥・器台	受:9.5 高:15.4 底:13.2	内:橙～浅黄橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	受・端、底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾊｹﾒ、中位はﾅﾃﾞ後板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	体部内面下半に黒斑。
第10図18	11	SK03	土器③	弥・器台	受:9.75 高:15.8 底:12.6	内:にぶい橙色 外:にぶい橙～橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	受・端、底・端:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:上位・下位はﾊｹﾒ、中位はﾅﾃﾞ後板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ	
第11図19	12	SK03	土器⑦	弥・広口壺	口:(34.1) 残存高:13.65 頸部径:(17.8)	内:にぶい橙～浅黄橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径13mm以下の砂粒をやや多く含む	良	頸・内:上位はﾖｺﾅﾃﾞ後板状工具ﾅﾃﾞ　頸・外:ﾅﾃﾞ後ﾖｺﾅﾃﾞ 他はﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部・頸部外面～体部外面に黒色顔料。
第11図20	12	SK03	土器⑬	弥・広口壺	残存高:22.1 体:28.55 底:7.1	にぶい橙～にぶい褐色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	体・内:上位～中位は板状工具ﾅﾃﾞ上位はﾍﾗﾐｶﾞｷ、下位はﾅﾃﾞ 体・外:ﾍﾗﾐｶﾞｷ 突:ﾖｺﾅﾃﾞ 底:ﾅﾃﾞ	黒色磨研土器。 体部外面上位・体部と底部の境付近に黒斑。
第11図21	–	SK03	下層	弥・蓋	天:4.8 高:6.35 口:17.4	内:にぶい橙色 外:橙～にぶい橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	天・内:ﾅﾃﾞ 天・外:器表摩滅のため調整不明 体・内:上半は板状工具ﾅﾃﾞ、下半はﾖｺﾅﾃﾞ 体・外:板状工具ﾅﾃﾞ後一部ﾍﾗﾐｶﾞｷ　口:ﾖｺﾅﾃﾞ	口縁部に黒斑。
第11図22	–	SK03	上層西半	弥・無頸壺	残存高:3.2	内:にぶい橙色 外:橙色	やや粗 径2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	器表摩滅のため調整不明	SK3上層東半出土片と接合。
第11図23	12	SK03	下層	弥・短頸壺	口:(20.9) 残存高:5.1	内:にぶい橙色 外:にぶい橙～にぶい褐色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	頸・内:ﾍﾗﾐｶﾞｷ 他はﾖｺﾅﾃﾞ	黒色磨研土器。 頸部外面に暗文。 口縁部外面に黒斑。
第11図24	12	SK03	上層西半	弥・広口壺	残存高:6.0	内:にぶい黄橙色 外:浅黄橙～にぶい黄橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口:ﾖｺﾅﾃﾞ、上端面は板状工具ﾅﾃﾞ 他は板状工具ﾅﾃﾞ	口縁部上端面に線刻、端部に刻目。 頸部外面に暗文。
第13図1	12	ST1	上甕	弥・甕棺	天:7.7 高:43.1 口:33.75	内:橙色 外:橙～にぶい橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	天・外:ﾅﾃﾞ 体・内:下半はﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ 口、突:ﾖｺﾅﾃﾞ 他は器表摩滅のため調整不明	体部内面中位にｺｹﾞ。 体部外面上位～中位にｽｽ。
第13図2	12	ST1	下甕	弥・甕棺	口:39.0 高:45.3 底:8.35	内:にぶい橙～にぶい黄橙色 外:にぶい橙色	やや粗 径3mm以下の砂粒をやや多く含む	良	口、突:ﾖｺﾅﾃﾞ 体・内:板状工具ﾅﾃﾞ 体・外:ﾊｹﾒ 底:ﾅﾃﾞ	体部内面下位に黒斑。 体部外面中位～下位はｽｽ。　底部外面に種子圧痕（小径のもの）。

挿図番号	図版番号	出土遺構		器種	法量 cm・g （復元値）	石材等	備考
第14図1	13	SK03	上層西半	石庖丁	長:4.9 幅:(7.1) 厚:0.7 重:37.8	菫青色ホルンフェルス	両面とも中央部は粗研磨面を残す
第14図2	13	SC01	上層西半	石庖丁	長:6.15 幅:(10.9) 厚:0.45 重:58.5	菫青色ホルンフェルス	B面は粗研磨段階 風化のため、刃の稜線が不鮮明
第14図3	13	SK03	下層	小形砥石	長:(2.8) 幅1.4 厚:1.25 重:8.8	石英斑岩	研面4面
第14図4	13	SC01	床面直上東半	小形砥石	長:(3.1) 幅:(2.55) 厚:0.9 重:10.6	粘板岩	裏面は研磨なし、側面に摺り切り痕跡あり、側面に黒色付着物あり
第14図5	12	SC03	下層	土製投弾	長:(3.6) 幅:2.75 厚:(2.35) 重:20.8	―	ラグビーボール状
第14図6	12	SC04	下層	土製投弾	長:3.8 幅:2.15 厚:(2.15) 重:13.6	―	ラグビーボール状
第14図7	13	SC03	SK01	泥窯片	長:(5.7) 幅:(7.1) 最大厚:3.7 重:78.0	―	SC03内SK01、SC03南半、土層ベルトと接合 繊維圧痕が縦に走る
第14図8	14	SC01	床面付近	ガラス小玉	長:0.355 幅:0.367 厚:0.232 重:0.1	ｶﾞﾗｽ	
第14図9	14	SC02	床面付近	ガラス小玉	長:0.351 幅:0.359 厚:0.371 重:0.1	ｶﾞﾗｽ	
第14図10	14	SC03	床面付近	ガラス小玉	長:0.338 幅:0.37 厚:0.173 重:0.1	ｶﾞﾗｽ	
第14図11	14	SC04	床面付近	ガラス小玉	長:0.305 幅:0.284 厚:0.211 重:0.1	ｶﾞﾗｽ	
第14図12	14	SC05	床面付近	ガラス小玉	長:0.352 幅:0.346 厚:0.22 重:0.1	ｶﾞﾗｽ	
第14図13	14・15	SC03	床面	柄付鉄ヤリガンナ	長:(4.7) 幅:2.1 厚:(1.3) 重:10.8	―	鋳造鉄斧再加工品

図　版　表　紙

発掘作業風景（大原小学生見学）

図版１

小郡若山遺跡９調査区全景（上空から）

小郡若山遺跡９調査区全景（北上空から）

小郡若山遺跡９調査区付近（上空から）

調査地から小郡官衙遺跡公園を望む（南東方向）

図版３

①１号住居跡土層断面（南西から）

②１号住居跡土層断面（南東から）

③１号住居跡中央土坑土層断面（南東から）

④１号住居跡焼土横土坑土層断面（西から）

⑤１号住居跡屋内土坑土層断面（北東から）

⑥１号住居跡屋内土坑土器出土状況（北から）

⑦１号住居跡ガラス小玉①出土状況（東から）

⑧１号住居跡ガラス小玉③④出土状況（東から）

①１号住居跡（北西から）

②１号住居跡西側ベッド状遺構（北西から）

③１号住居跡西側ベッド状遺構（南東から）

④西側ベッド状遺構土器出土状況（北から）

⑤１号住居跡東側ベッド状遺構（西から）

⑥１号住居跡床面検出状況（南東から）

⑦１号住居跡完掘状況（北西から）

⑧１・３・４号住居跡（北東から）

図版５

①３号住居跡土層断面（北西から）

②３号住居跡（西から）

③３・４号住居跡の先後関係（北東から）

④北西側遺物出土状況（南から）

⑤ 鉄ヤリガンナ出土状況（南から）

⑥４号住居跡土層断面（南西から）

⑦１・３号住居跡の先後関係（北東から）

⑧３・４号住居跡の先後関係（東から）

①１号土坑土層断面（東から）

②２号土坑土層断面（北西から）

③２号土坑遺物出土状況（東から）

④２号土坑遺物出土状況（南西から）

⑤３号土坑土層断面（南東から）

⑥３号土坑遺物出土状況１（南から）

⑦３号土坑遺物出土状況２（南西から）

⑧３号土坑遺物出土状況３(北西から）

図版７

①１号甕棺土層断面（南東から）

②目貼り粘土土層断面（南東から）

③１号甕棺検出状況（南東から）

④目貼り粘土詳細（南東から）

⑤１号甕棺検出状況（南から）

⑥１号甕棺下甕立割状況（南東から）

⑦１号甕棺上下棺検出状況（南から）

⑧１号甕棺内部状況（南東から）

①１号掘立柱建物（北西から）

②１号掘立柱建物（北東から）

③ＳＢ 01 ｐ１土層断面（西から）

④ＳＢ 01 ｐ２土層断面（南西から）

⑤ＳＢ 01 ｐ３土層断面（北東から）

⑥ＳＢ 01 ｐ４土層断面（北東から）

⑦ＳＢ 01 ｐ５土層断面（南東から）

⑧ＳＢ 01 ｐ６土層断面（北から）

図版９

①ＳＢ 01 ｐ７土層断面（東から）

②ＳＢ 01 ｐ８土層断面（南東から）

③ＳＢ 01 ｐ９土層断面（南東から）

④ＳＡ 01 ｐ１土層断面（南から）

⑤ＳＡ 01 ｐ２土層断面（北から）

⑥ＳＡ 02 ｐ１土層断面（西から）

⑦ＳＡ 02 ｐ２土層断面（西から）

⑧ＳＡ 02 ｐ３土層断面（西から）

SC01（5－2）

SC01（5－4）

SC01（5－3）

SC01（5－2）

SC02（5－7）

SC02（5－11）

SC03（5－14）

SC01（5－4）

SC01（5－3）

SK02（7－1）

SK02（7－7）

SK02（7－16）

SK02（7－18）

SK02（7－19）

SK02（7－14）

図版 11

S K 02（7 － 15）

S K 02（8 － 19）

S K 02（8 － 19）

S K 02（8 － 20）

S K 02（8 － 21）

S K 03（10 － 1）

S K 03（10 － 2）

S K 03（10 － 11）

S K 03（11 － 21）

S K 03（10 － 16）

S K 03（10 － 17）

S K 03（10 － 18）

S K 03（10 － 13）

S K 03（10 － 12）

S K 03（10 － 14）

S K 03（10−15）

S K 03（11 − 19）

S K 03（11 − 20）

S K 03（11 − 23）

S K 03（11 − 24）

S T 01 上

S T 01 下

S K 03（10 − 7）

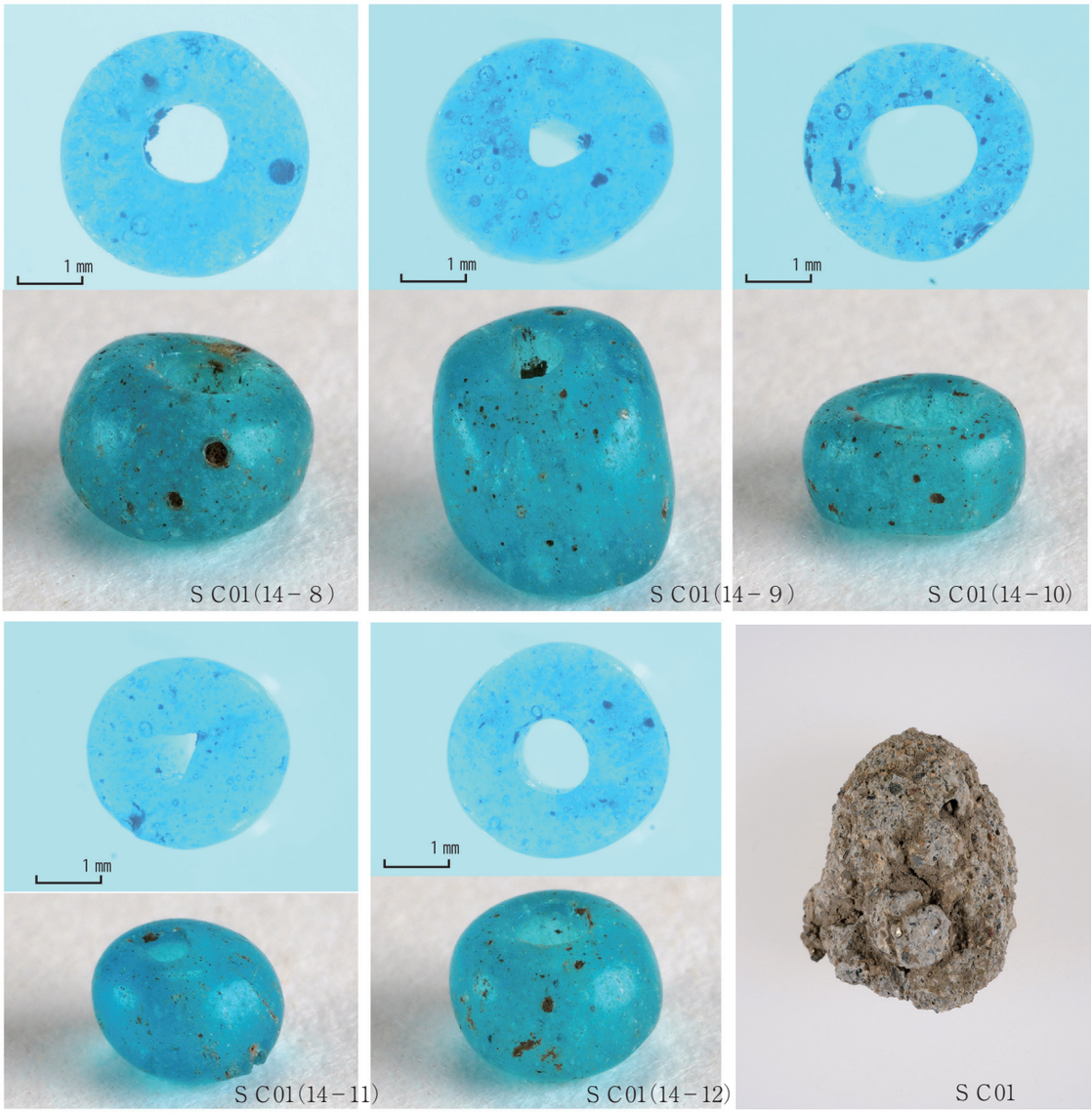
S B 01　　S C 04（14 − 6）　　S C 03（14 − 5）

図版 13

ＳＣ 03（14 － 7）

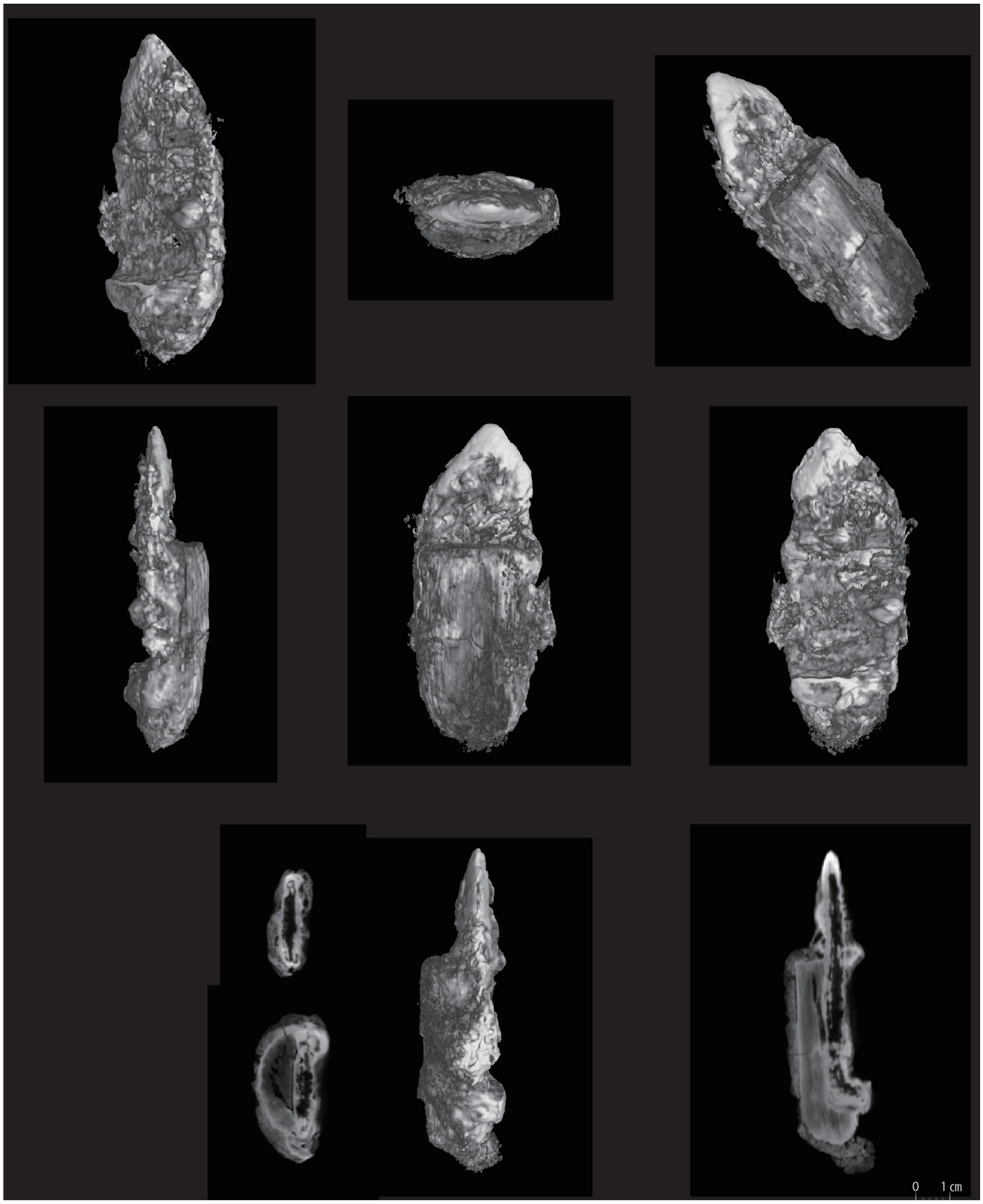
ＳＣ 01（14 － 2）　　ＳＫ 03（14 － 1）

ＳＣ 01（14 － 4）　　ＳＣ 01（14 － 3）　　ＳＴ 01


1 mm
1 mm
1 mm
S C01(14－8)
S C01(14－9)
S C01(14－10)
1 mm
1 mm
S C01(14－11)
S C01(14－12)
S C01

S K03(14－3)

図版 15



柄付き鉄製ﾔﾘｶﾞﾝﾅ X 線 CT 画像（ＳＣ 03 出土）

	報　告　書　抄　録
ふりがな	おごおりわかやまいせき
書名	小郡若山遺跡９
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 344 集
編著者名	山崎　頼人
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5147-3　℡0942－75－7555
発行年月日	令和４年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
小郡若山（おごおりわかやま）遺跡（いせき）９	福岡県（ふくおかけん）小郡市（おごおりし）小郡（おごおり）	40216		33°40′24″	130°55′48″	20191224～20200228	152 ㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小郡若山遺跡９	集落	弥生 奈良	竪穴住居・掘立柱建物・祭祀土坑・周溝状遺構 掘立柱建物・土坑	弥生土器・石器・土製品・鉄器・ガラス製品 土師器・須恵器	柄付き鉄製ﾔﾘｶﾞﾝﾅの出土

本遺跡はこれまでに８次の調査を実施している。小郡官衙遺跡に近接しており、本調査でも奈良時代の建物跡１軒等を確認した。主軸方向から小郡官衙遺跡第Ⅱ期と同時期と考えられる２×２間の総柱建物である。弥生時代の集落では、中期集落だけでなく、後期の集落も確認でき、小郡・大板井遺跡群の後期環濠集落の南東方向への広がりを確認できた調査となった。

小郡若山遺跡９

小郡市埋蔵文化財調査報告書第 342 集

令和４年　３月　31 日

発行　小郡市教育委員会

小郡市小郡 255－1

出版　片山印刷（有）

小郡市祇園1丁目8－15